



千葉白菊会会報

第56号

令和元年9月発行  
(2019)

私はもう少しで八十二歳になるが、今迄、何度か生死を分かつような場面に遭遇し、ここまで生き永らえて来られたことは望外の喜びであり、心から感謝している。

太平洋戦争敗戦の時は七歳だったが、戦後一年間は、旧満州のシベリアに近い街での難民・軟禁生活の中で、間一髪、殺されかけた怖い体験をするなど筆舌に尽くせぬ死や生に対する恐怖や不安を強いられた。又、二ヶ月近い日本への引揚行の中では、食料が枯渇し乳飲み子は全滅、私も飢餓状態の日々であった。

長じては、トラックにはねられ頭部打撲で全治三ヶ月の事故に遭い、妻と生後十ヶ月の娘を残して「もう死ぬのか」と、妻と父に遺言したこともあった。病気で、幼少の頃、疫痢（赤痢の重症型）で死線を彷徨ったと聞かされ、ステージ4Bの前立腺がんの手術を受けたのは十二年前である。

このような数々の体験の中にあっても、今ここに生かされていることを本当に有り難く思い、私はこの感謝の気持ちを他者に、社会に何とかしてお返し出来ればと言う気持が強くなり、「他者に仕える」ことを生活信条として掲げ、数々のボラ

## 八十路からの 私の生き方



千葉白菊会

会長 大澤 國昭

ンティア活動に取組んできた。

そしてボランティアの究極の姿として死してなお医学・医療の発展に役立つ献体のことを知り、現在そのお世話役を務めさせていただいているが、このめぐり合わせに心から感謝している。

しかるに、八十路に踏み込んだ頃から、私の「体力」はがくつと落ち病院通いも多くなり、又、「知力」も記憶力や注意力を中心に減退してきている事実は如何ともし難いことである。

これらは高齢による老化として甘受しているが、厄介なことに「気力」即ち「やる気」だけは衰えていないことである。これは一見結構なことと思われがちだが、「体力」と「知力」、なかならず注意力が追いつかないと、周囲に迷惑をかけてしまい、その「やる気」がむしろあだ（老害）となつて、その結果、今迄経験しなかつたような恥ずかしい思いを耐え忍ぶ「忍恥症」を味わうことになりかねないのである。

そこで私は私の心に潜む「我」の思いを弱めるため「感謝・謙虚・寛容」の三Kを今一度心に深く刻み常に反芻し、弱い自らを戒め励ますためにも、この三つを文字や言葉に出して取組んでいるところである。

そして、各種ボランティア活動の責任ある役目は極力若い方をお願いし、私自身は新リーダーのもと出来ることを誠実に実行し、どうしても後継者へのバトンタッチに時間を要するものについては、特にこの三Kに心して取組んでいこうと思っている。

# 目次



巻頭言 会長 大澤 國昭 …… 1

第三十八回 千葉白菊会総会 …… 3

会長挨拶 大澤 國昭

医学部長祝辞 中山 俊憲

学生代表 感謝の言葉 八幡 春香

成願者名簿 …… 8

講演「百年先を見つめてく鷗外と元号」 …… 10

環境生命医学 教授 森 千里

総会参加者の声 …… 14

平成三十年解剖学実習

解剖学実習ガイドンス …… 15

医学部感想文 …… 16

岩崎 真奈・岡本 和也・小川 茉里奈・小林 秀輔

羽田 幸祐・吉良 慎一・平島 哲矢・山下 雄大

中熊 日奈子・松下 華子

「肉眼解剖学特論とは」 …… 26

環境生命医学 特任助教 松山 善之

肉眼解剖学特論感想文 …… 26

西垣 美穂・高村 隆

看護学部感想文 …… 28

オノノジユ 愛鈴・甲斐 茉里奈・横田 佳都

「感謝！千葉白菊会が支えるクリニカルアナトミーラボ」

環境生命医学 講師 鈴木 崇根 …… 32

CAL参加者の感想 …… 34

河野 衛・越智 敬大・星野 敢

脇田 浩正・渡辺 堯仁

第九十二回 千葉大学医学部解剖慰霊祭 …… 38

学生との懇談会・白衣式 …… 40

医学系総合研究棟建設 …… 41

篤志解剖全国連合会総会・研修 …… 42

白菊の広場 …… 44

田久保 友也・森 眞一・皆川 英治・小西 典子

杉原 幸江・平尾 光枝・小澤 知子・照屋 道子

渡辺 米・齋藤 忠司

総会のご案内 …… 45

寄付者名簿 …… 47

会員の状況 …… 48

平成三十年 事業・会計報告 …… 50

二〇一九年度 事業計画・予算 …… 53

丸山前会長を偲んで・献体の碑だより …… 55

事務局からのお知らせ・役員紹介 …… 56

Q & A …… 58

ご家族の方々へ …… 60

## 第三十八回千葉白菊会総会が開催

# 令和初の総会場に溢れた感謝と深い感銘!!

いまや会員が待ち焦がれる医師の卵たちと束の間の触れ合い

令和元年度、第三十八回目を迎えた千葉白菊会総会が六月八日、千葉大学看護学部講義・実習室にて開催されました。

医学部正門から会場への道案内には、早朝から医学部の学生ボランティアの皆さんが当たってくれました。梅雨入り間



総会の朝、会員に傘をさしかける学生ボランティア

もない若葉の小道を医師の卵たちがエスコートしてくれる束の間は、いまでは総会出席会員の皆さんの待ち焦がれるひと時になっています。

午前十時、司会の鈴木崇根副会長が開会を告げ、参加者全員で献体成願者に対する黙とうを捧げたのち、大澤國昭会長が冒頭挨拶で、今後も献体者の発掘に尽くしていくなどの強い決意を語りました。

続いてご来賓の中山俊憲千葉大学医学部長、森千里環境生命医学教授、山口淳機能形態学教授、中山善将医学部事務長の紹介があり、来賓を代表して中山医学部長が献体者と白菊会への深い感謝の意を述べられました。

この後登壇した学生代表の医学部三年生・八幡春香さんが、解剖実習の無事終了を報告するとともに、献体者への真情溢れる感謝の言葉を述べました。八幡さ

んの発言中、白菊会会員に優しく対面するように整列する医学生百二十人の凛々しい姿もまた、総会出席者全員の心に深い感銘をもたらしたに違いありません。

ご来賓・医学生らが退場したのち、大澤会長により千葉白菊会役員ら十二人の紹介。次いで平成三十年事業報告、監事による同年度収支決算報告があり、さらに二〇一九年度事業計画(案)、収支予算書(案)などが提出され、質疑応答のあと全ての報告・審議事項が拍手多数で承認されました。

小休憩のあと、総会おなじみの講演は森千里先生の「鷗外と三元号」。興味津々の内容に会場は大盛り上がりでした。恒例となった九十歳以上の総会参加者紹介は篠塚なかさん、渡邊勝さんの二名。最後に総会の円滑進行を支えてくれた学生ボランティアたちへ拍手で感謝を表し、第三十八回千葉白菊会総会が幕を閉じました。

(野村)

## 会長挨拶

# 献体登録に 更なるご協力を

千葉白菊会会長 大澤 國昭



ご紹介頂きました大澤でございます。

本日は何かとご多忙のところ、千葉大学医学部より中山医学部長をはじめ幹部の方々のご臨席を賜り、令和になって初めての千葉白菊会総会を「第三十八回総会」として開催できますことを、心より御礼申し上げます。

又、会員の皆さまには、遠方の方は早朝にお宅を出られた方も多く、このように大勢の方々にお集まり頂き、心より御礼申し上げます。

更に、本総会の様々な場面で、千葉大学医学部の事務部門や解剖学教室の皆さまに多大なご支援を頂き、医学生の方々にもボランティアとしてお手伝い頂き、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。いと存じます。本当に有難うございます。さて、お時間の関係もございいますので、私の方からは皆さま方に二点、お願いを申しあげ開会のご挨拶に替えたいと存じ

ます。

一つ目は、毎度申し上げていることですが、初めて総会に出席された方も居られますので申し上げますと、皆さま方の口コミによる献体登録者募集へのご協力をお願いであります。献体すると何か経済的に得するというものではなく、ただ純粋に「無条件・無報酬で、医学・医療の教育・研究のために貢献したい」というものですから、確かに簡単にいかないことだとは存じますが、この究極のボランティアとでも言うべき献体の同志を募ることに、これからも一層お力をお貸し願いたいと存じます。千葉白菊会としても、千葉大学医学部出身者の経営する病院・クリニック等へのポスター掲示や、ホームページの充実など広報活動に力を入れていくべく準備中でございます。二つ目のお願いは、折角一大決心をし、面倒な同意書もやっとそろえて献体登録

をしたのに、ご家族への連絡が不十分だったために、亡くなったのに献体出来なかったと言うような、本当に残念で悔しいケースが相変わらずあり、確実に献体出来るようご家族への連絡を徹底して頂きたいことです。最近では、登録者の亡くなったことを大学に連絡すべき方が先に亡くなってしまいう場合も結構多くありますので、その場合はお子様の誰それときちんと決めておく準備が必要と思うのです。そこでこれからの献体登録の際には、同意者欄に連絡責任者の順位を設け、申込前からその準備を明確にするようにしたいと考えております。すでに会員となっておられる皆さま方は、「ご家族へのお願い」(ブルーカード)を関係者皆さんにお持ち願うようにするなど、何卒よろしくお願い申し上げます。

最後に、本日は久しぶりに森千里先生の大変興味深い講演もございます。有意義なお時間をお過ごしなさいませう。お願いし、そして何よりもこれからの皆さま方のご健勝を心より祈念し、私のご挨拶とさせて頂きます。有難うございました。

祝 辞

# 医学教育を支えるのは 尊い献体から

千葉大学医学部長 中山 俊憲



第三十八回千葉白菊会総会にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

昭和四十一年に創設されました千葉白菊会の皆様には、半世紀以上にわたり千葉大学医学部の教育のための献体活動にご尽力いただきました。誠にありがとうございます。大澤会長をはじめ、皆様の尊いお気持ちに感謝申し上げます。千葉大学医学部教職員一同、厚く御礼申し上げます。

「献体」は無条件・無報酬からなる自発的行為であり、自らの体を医学の発展のために捧げるという篤志行為であります。この尊いお気持ちによる献体がなければ、日本における医学教育は成り立ちません。医師を目指す学生にとって、肉眼解剖は医学を学ぶ出発点であります。単に解剖学の医学的知識を習得するという面のみでなく、生命の尊厳を知るといふ、何物にも替えがたい精神的教育を受

けることでもあります。

また、この崇高なお気持ちによる「献体」と向き合うことは、献体に対する感謝の気持ちと、献体をされた方の期待に応える責任と自覚を育てます。私達教職員は、解剖学実習を終えた学生達が、見違えるほどの人間的・精神的成長を遂げることを毎年認識しております。

この様にして育てていただきました本学の学生が、将来、高度な知識と技術、そして豊かな人間性を併せ持つ医師となり、多くの病気の方を治すことで、献体をしてくださいました方々のご恩に報いることが出来ますよう、更なる精進をすることを願ってやみません。

数年前、医学部学生の逮捕につながる不祥事がありました。千葉大学医学部では、二度とこのような不祥事が起こらぬよう、倫理教育の強化を目指した新たな教育プログラムを実施しているところ

です。ご安心いただければと思います。

また、千葉白菊会の皆様には、この様な医学生のみならず、臨床医師の技量向上のための教育への献体にもご協力を頂いております。この、医師の教育のための献体により、医師の手術手技の向上や新たな治療法の開発につながるものと信じております。この教育に参加した本学の医師達も、献体をいただいた方々へ、そしてご遺族の皆様にも深く感謝しながら研修を行っております。この研修が、千葉大学医学部附属病院のみならず日本・世界の医療の向上につながるものと信じて疑いません。千葉白菊会の皆様の医学の進歩に対する高い期待と深いご理解とご協力の賜物と、心から感謝申し上げます。次第です。

最後になりましたが、千葉白菊会のおまますのご発展を祈念し、簡単ではございますが私の挨拶とさせていただきます。



## 感謝の言葉

医師への覚悟が  
芽生えました

医学部三年 八幡 春香



はじめに、肉眼解剖学実習が一月七日の納棺式をもちまして、無事に終了することができましたことを、ここに報告致します。

約三ヶ月にわたり私達の学習を支えてくださったご遺体の先生、ならびに千葉白菊会の皆様に、千葉大学医学部三年生を代表して心より御礼申し上げます。もう半年がたとうとしておりますが、まだ記憶は鮮明で、地下の実習室に立っていたのも昨日の事のように思い出します。実習を通じて学んだ知識と、命について考え続けご遺体の先生と向き合ったこの経験は、医師としての長い人生を支えるかけがえのないものであったと改めて感じていきます。

昨年の十月、解剖実習が始まりました。実習が始まる前は「ご遺体と向かい合う」ということに対する漠然とした恐怖や、メスを握る責任の重さを感じていました。しかし初日のガイダンスで白菊会役員の皆様にお話を伺い、献体の精神について理解を深めることができ、そのお陰か不安は消え、むしろご遺体の先生に見守られているかのように心は穏やかで、想像

していたよりもずっと充実した実習を修めることができました。実習が進むにつれてメスを握ることに慣れていく自分自身がふと怖くなることはありませんでしたが、それでも実習中は体感できるものすべて吸収しようと決め、集中して学ぶことができました。しかし、納棺式を終えて最後の黙祷を捧げた時、「ようやく終わっただ」というとてつもない脱力感に襲われ、自分が想像以上に気を張って頑張っていたことに気づかされました。

私は医学部に入学したあとも、ずっと迷い続けていました。人の命を救う、という職業に私のような未熟な人間が就いても良いのか、ということについてです。私の親族に医師はいませんが、何回か病院にかかったことがある、という程度にしか医療との関わりを持っていませんでした。医師になって何かしよう、というような大きな志がある訳でもなく、特別興味がある事柄がある訳でもありません。小さい頃から漠然と医師になりたいと思っただけでしたが、自分の人生を決める覚悟が持てずにいたのです。しかしご遺体の先生の前に立ち、メスを握って、

皮膚に刃を入れたその瞬間に、私の心の中に小さな覚悟が芽生えました。命を預けられたような、想いを託されたような重たい学習の時間を終えて、私の中の迷いは完全になくなりました。実習を終えた今、「人の命に関わる仕事をする」という覚悟が私にはあります。

私は実習前まで、「死」というものは得ていない、とても恐ろしいものに感じていました。しかし、「死してなお人の役に立つ」ということを生前に決断されているご遺体の先生を前にして、「死」というものが全ての終わりでは無いこと、むしろ「死」から人はたくさんのことを学ぶことができ、私達はそれを一生をかけて、全身全霊で学ばなければならぬ」ということを悟りました。今の私には到底できない決意をされ、私の前に横たわられたご遺体の先生に、深い畏敬の念を覚えずにいられません。先生のおかげで私はようやく、医学生として一歩を踏み出すことができました。まだまだ医療者として未熟ではありますが、医学の発展のため献体をしてくださった先生方のご意志に報いるよう、今後も精進して参りたいと思います。

最後になりますが、故人の方々のご冥福をお祈り致しますと共に、解剖実習に携わって頂いた全ての皆様に深く御礼申し上げます。結びの言葉と致します。本当にありがとうございます。



正門前で会員を待つボランティアの学生たち



## 第38回総会写真館



大勢の学生に囲まれて聞く「感謝の言葉」

質疑応答の  
一コマ



今年は2名  
90歳以上の方



七十八名の成願者に黙とう



篠塚 なか 様  
(93才)



渡邊 勝 様  
(90才)

# 成願者名簿

平成三十年四月一日より平成三十一年三月三十一日までにて七十八名の会員が成願されました。  
 謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

(注) 千葉大学に献体(成願じょうがん)された日を記載しています。(死亡年月日ではありません)

故	藤村 武 様	市川市	88 歳	故	蛭谷美智子 様	鎌ヶ谷市	90 歳	故	中谷 祐之 様	夷隅郡御宿町	77 歳
故	辻本智恵子 様	船橋市	88 歳	故	三成 芳郎 様	松戸市	67 歳	故	寺嶋 克郎 様	市原市	89 歳
故	金森 和子 様	南房総市	76 歳	故	増澤 春江 様	松戸市	86 歳	故	千年 静江 様	銚子市	89 歳
故	宮尾 ヨシ 様	木更津市	98 歳	故	新津 良治 様	船橋市	99 歳	故	田中 春男 様	柏市	84 歳
故	江村 ヤヨ 様	木更津市	98 歳	故	苫米地正喜 様	千葉市中央区	85 歳	故	高橋 恭子 様	千葉市若葉区	90 歳
故	小川 たま 様	富津市	98 歳	故	保科 和江 様	千葉市中央区	97 歳	故	岩井 清 様	千葉市若葉区	92 歳
故	島田 吉蔵 様	大網白里市	102 歳	故	森田 保 様	千葉市美浜区	86 歳	故	森 昭子 様	市原市	63 歳
故	井菅 昭 様	木更津市	91 歳	故	栗原清八郎 様	千葉市美浜区	76 歳	故	岩本 房子 様	我孫子市	78 歳
故	永松 哲彦 様	木更津市	87 歳	故	鈴木 かね 様	四街道市	93 歳	故	君和田ミサヲ 様	市原市	94 歳
故	中村 節夫 様	印西市	76 歳	故	東條 房子 様	船橋市	94 歳	故	岸 照江 様	木更津市	71 歳
故	鶴川 勇 様	流山市	83 歳	故	小川 三枝 様	千葉市緑区	94 歳	故	岸 望 様	市原市	93 歳
故	飯岡七エ子 様	印西市	86 歳	故	佐藤 トヨ 様	船橋市	93 歳	故	安生 守邦 様	山武市	74 歳



# 百年先を見つめて… 鷗外と元号



千葉大学大学院医学研究環境生命医学教授  
千葉大学予防医学センター長

森 千里

いまや千葉白菊会の名物になった総会記念講演。今回のテーマはまさに令和新時代のスタートにぴったりの「百年先を見つめて」鷗外と元号」です。講演者はその森鷗外のひ孫としても知られる森千里先生。軽妙な語り口調で聴衆を魅了した一部始終をじっくり再録しました。どうぞお楽しみください。

## 日本の解剖学の発展にも 足跡を残した鷗外の家系

私は平成十九年に千葉大学に着任し、千葉大学医学部の学生や大学院生の肉眼解剖学教育を担当して早や二十年が経ちました。令和元年の記念すべき千葉白菊会総会（令和元年六月八日）において講演の機会を与えて頂きましたことを大変光栄に感じております。

白菊会からのご依頼に「曾祖父鷗外の事を交えての話」を、との事でしたので、解剖のお話とともに、乏しい知識ではありますが令和時代の幕開けに合わせ「鷗外と元号」についても紹介させていただきます。

きます。

鷗外の長男於菟（私の祖父）は、戦前は旧台北帝国大学の、戦後は東邦大学の解剖学教授となり、現在の白菊会の基となる献体組織づくりに尽力しました。於菟の次男富（私の伯父）は東北大学で、そして私も現在千葉大学で解剖学の教授をしており、解剖学には縁の深い家系です。

また、鷗外は「衛生新編」などの公衆衛生の教科書を初めて日本語で出版し、上下水道の整備をはじめとした公衆衛生面に着目した都市づくりが国民の健康向上に欠かせないことをさまざまメディアを通じて説きました。さらに、日本で初めての、日本人男性と西洋人女性の恋愛小説「舞姫」、地方に伝承されてきた民話を現代風にアレンジした「山椒大夫」、日本で安楽死を題材にした初の小説「高



大人気の森先生の講演は6年ぶり

瀬舟」など多数の小説を世に出し近代日本文学の発展に貢献し、於菟と富は肉眼解剖の教科書「分担解剖学(金原書店)」を編集・分担執筆し、日本の解剖学教育の発展に尽くしました。本の出版については、私もいくつか環境予防医学に関する本を出してきました。本を書いて、時を超えて後世に伝えるものを残す事は自分の生きた証としても大事な事と感じています。

## 晩年の情熱を傾けた

### 二百四十代余に及ぶ「元号考」

本年五月一日、年号が令和に変わった日、講談社学術文庫より「元号通覧」が発刊されました。鷗外の絶筆となった「元号考」を改題したものです。

鷗外は一九一六年(大正五年)四月に陸軍軍医総監を辞任し、翌年五十五歳の時に帝室博物館総長兼図書頭ずしょのかみに就任しました。その当時、図書寮では天皇の諡号しごう(おくり名)の出典を考証する「帝諡考」を編纂するかどうかが問題になっていたのを、鷗外は就任後ただちに編纂を決定し、一年半後に百部のみ非売品として出版されました。その後さらに、西暦で言うところの六四五年からの「大化」から一九一二年

からの「大正」に至る二百四十余りの元号の出典について考証し、一九二二年(大正十一年)、六十歳で没する数日前まで加筆していたのが「元号考」です。全文漢文で、改元した天皇、改元になった理由、出典となった中国の古書の名前、元号の候補、元号案を勘申した人の名前などが並び、現代人から見ると読むのに困難を極めるうえ、読んでいても面白くもなんともありません。もちろんストーリーなど無く、元号の「辞典」と呼んでもよい作品です。

この「元号考」に鷗外は最後の力を振り絞り、鬼気迫るほどの情熱を傾けました。ある朝、図書寮に出勤した職員が職場の前の坂に差し掛かると、自分の十歩ばかり前をのろのろとまるで這うようにして坂を登っていく老人がいる。見ると、右の足を引きずるようにして前へ出し、



「元号通覧」  
講談社学術文庫  
(2019.5刊)

次に左の足を引きずるように前へ出す。たちまち老人を追い越そうとしてふと見ると、なんとそれが鷗外だった、ということです。(『元号通覧』解説より)

また、親友賀古鶴かこつるど所あての手紙(大正十一年五月二十六日付)では、以下のように書いています。「女、酒、たばこ、宴会、皆絶対に辞めている。この上は役を退くことより外ない。しかしこれは僕の目下やつている最大著述(元号考)に連繋している。これをやめて一年長く呼吸していると、やめずに一年早くこの世をおいとま申すとどっちがいいか考え物である。また僕の命が著述気分をすてて延びるかどうか疑問である」。(出典:同上)

つまり、鷗外はこの「元号考」を人生で「最大著述」と明言し、命を削って執筆していたと思われるのです。事実、この手紙を書いた一か月半後の七月九日、ろうそくの炎が最後の最後まで燃えてふっと消えるように、鷗外の魂は病に倒された肉体を離れて天に昇っていきました。

「元号考」は七割方完成していましたが、鷗外が未完のまま没したため出版されないままでした。そして、一九二六年

(大正十五年)に「鷗外全集」が編纂された際、その第六巻に収録される時に、図書寮での部下であり、鷗外が死ぬ前の二十日ばかりは日記の代筆を依頼するほど信頼し気が合っていた吉田増蔵が残り執筆、補填して全集に収められました。

## それは日本人の

### アイデンティティー探しだった

なぜ、鷗外はこのような書物を編纂するのに、体調が悪化する中、情熱を燃やしたのでしょうか。

鷗外が留学先のドイツから帰国した一八八八年(明治二十一年)当時、日本はまだ近代国家としてのあり方を模索している状態でした。鷗外の作品に「普請中」(明治四十三年)という短い小説があり、主人公は「日本はまだ普請中だ」と言っています。日本の伝統を否定しひたすら西洋化することが日本の目指す道なのか、足掛け四年を先進国ドイツで過ごした鷗外ならではの悩みでした。

鷗外がドイツでものした論文五本の中に「日本家屋の民俗学的考察」というタイトルの論文があります。「近年日本では都市の建物をヨーロッパ風に縦に積み重ねようとしているが、日本の気候風土

には日本の伝統的家屋の建て方が合っているし、健康にも良いのである」ということを、日本のことを知らないヨーロッパ人にもなんとか伝わるように苦心して書いたものです。実はその論文の冒頭には、のちに脚気紛争で論争の相手側の代表となる海軍軍医、高木兼寛の名が挙げられ、「日本の都市を西洋風にしよう」としているグループの代表」と紹介されています。日本人の体質、文化を無視してただ西洋の真似をするだけでは、日本人の健康を向上させることにはならない、というのが鷗外の主張でした。

ドイツ留学中にドレスデンで、ハインリッヒ・ナウマンから「日本人は西洋人の真似はできるが自分で考えることはできない無能な国民」と公の場で侮辱され、黙っていられず反論した鷗外の悔しさは、「日本とはなにか、日本人とは何か」というアイデンティティーについて一生考え続けるエネルギーになったのではないのでしょうか。

今でも、海外に留学した人は、初めて日本人としてのアイデンティティーに悩むことでしょう。私自身、三十歳で米国立環境衛生研究所(NIEHS)に留学した年、日本を知らない人たちが日本お

よび日本人を誤解と偏見の目で見ていることに気づきました。

一方で医学の発展を含めた近代化のもたらす大きな恩恵を日本に広めて日本国民を幸福に導き、また一方では西洋にはない日本の伝統文化を保存していくのが日本人としての誇りを保つのに重要である、と鷗外は考えていたのではないかと私には思われます。元号の歴史を調べた



熱心にメモを取る会員も

ところ、実は、「明治」も「大正」もほかの国で既に使われていた元号であった上、「正」の字は縁起が悪いとして中国では決して使っていないのに、「大正」には使ってしまった、なにも中国の真似をする必要はないが、「大正」を元号にしたのは担当者の勉強不足だった、と賀古宛に手紙を残しています。

完全無欠の元号を大正の次には作らねばならない、という執念のようなものが鷗外を突き動かし、その死にざまをつぶさに見守った弟子ともいえる吉田増蔵は「自分以外には鷗外の考えを引き継ぐ者はいない」という強い使命感を持っていたでしょう。鷗外亡き後、宮内大臣からの元号選定の命令に、増蔵は三十以上の元号案を提出しました。その中に「昭和」もあったのです。

昭和、平成、そして令和と、その後の元号選定には鷗外が伝統を学びなおす中で見つけた日本人の誇りが脈々と受け継がれていることを、国民の一人としてうれしく思っています。

※ 勘申<sup>かんじん</sup>…朝廷で、儀式や行事などの先例、典故、日時、吉凶などについて上申すること

## 森千里先生 著書のご紹介



鷗外と脚気―曾祖父の足あとを訪ねて  
NTT出版 (二〇一二年刊)

\*白菊会事務局にも在庫がございますので  
ご興味のある方はお問い合わせください。

## 文京区立森鷗外記念館

開催予定の展示 「永井荷風と鷗外」  
会 期 2019年10月12日(土)～  
2020年1月13日(月・祝)  
開館時間 10時～18時  
(最終入館は17時30分まで)



東京都文京区立森鷗外記念館は、鷗外が人生の後半を過ごした家、「観潮楼(かんちょうろう)」跡地に建っています。鷗外の長男於菟は、「私の魂の故郷である」と言っていました。鷗外の足跡をたどる写真や映像のほか、ドイツ留学中の思い

出の品や関連資料なども展示されていますので、興味のある方はぜひ足をお運びください。

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4  
電話：03-3824-5511  
<https://moriogai-kinenkan.jp>

## 総会参加者の声

★ 今年度の総会に出席された会員の自由なご意見・ご感想をアトラダムに収録しました。皆さんありがとうございます。

★ 森先生の講演を四回もお聞きできたことは望外の幸せなことです。鷗外が津和野の地にお墓を立てるにあって「森林太郎として死せんと欲す」と言う言葉が大好きです。地位に少しもこだわらぬお人柄を千里先生に重ねて思ったことでした。素晴らしいご講演をありがとうございます。再び鷗外全集を読み直したくなりました。

★ 父は戦死、死因は戦争性栄養失調症とか。遺骨など返ってくるわけでもなく、むなしかったです。母は平和になった日本です。母はそれなりの医療を受けて死ぬるのには有り難い事だと思ふことしきり。より以上の医学の発展のため献体することになり、二〇〇〇年献体しました。私も母の遺志を受け前会長・青柳事務局長のお世話で入会しました。これからは身体に気をつけて、長生きし、献体しようと思っています。

★ ① 学生代表の感謝の言葉に「感動」。男子学生が多い中で女子学生からの言葉を拝聴。ありがたいひとこまであった。② 総会が粛々と進行できたことはよかった。

③ 森千里先生の講演のなかで「高瀬舟」が安楽死をテーマにしたものだと云々。過日の福生事件で人工透析を中止したことで頭をよぎりました。終末期医療のあり方で自己決定のことが問題点となります。奪っていい命はないはずです。自分自身終末期医療のあり方を学んでいきたいです。

★ 三十年位前に入会しました。今回初めて参加させて頂きました。学生さんに直接あえてとても良かったです。良いお医者様になって下さい。お願いいたします。今日はありがとうございます。

★ 毎年の総会の案内状・当日現地での会場案内等誠に準備周到に実施していただきご苦労をおかけして感謝いたします。又、講演は毎回私共の知識の向上に役立てに配慮していただき参加する励みとなります。今後ともよろしくお願いいたします。

★ 昨日の白菊会の総会と慰霊祭では大澤会長、鈴木副会長はじめ役員の方たちには大変お世話になりありがとうございます。

ました。森先生の「百年先を見つめて…鷗外と元号」も楽しく聞かせていただきました。たまには病気や医学以外のテーマもいいものだと思います。毎年ながら学生たちのご協力はありがたいことと感じておりました。総会では質問の時間もありませんでしたので送らせていただきます。



# 解剖学実習ガイドンスに参加

## とどけ！ 献体者の想い

平成三十年十月五日（金）医学部二年生を対象に「肉眼解剖学実習ガイドンス」が開催されました。

ガイドンスは第一講義室で、初めて「遺体」に接する緊張と不安を抱える医学生達に向け環境生命医学の鈴木崇根先生の司会で開始されました。

山口淳副医学部長（医学部長代理）のご挨拶そして肉眼解剖学実習の「献体についてのビデオ学習」と続き、実習の先生となるご遺体が多く「無条件・無報酬」の献体によって支えられていることを学びました。

次に環境生命医学の森先生によりこれから始まる実習についての講義がありました。参加者学生はじめ医師・医療関係者への励まし・期待であり、それは無条件・無報酬の献体と言う行為によって成り立っていることを強調されました。

続いて、当日「ガイドンス」に千葉白菊会の代表として参加している千葉白菊



献体登録のきっかけを語る野村理事

会の会長・理事・監事の紹介がありました。初めに野村理事が献体登録のきっかけを語り始め「親友の死により聞かされた献体への強い想いと意志」に触発され、自分も献体登録へと想いに至る。しかし、献体と言う思いは、自分自身の強い想いのみだけではなし遂げられず、近親者への説得や理解及び関連者等の理解を乗り

越えなくてはならず、「自分の意志」のみで、自分の意志を貫くことのむずかしさを改めて知るきっかけにもなったと話しました。次に水野理事からは、お父様の死をきっかけに献体の意志を固めたが、それは長年自分の目で知った千葉大、千葉大病院に多くの受診者が命を救われ・治療を重ねている様子を見て共に喜びと感謝の想いを共に重ねていたが、その基本の医療行為に解剖があることを知ったことにより「千葉大の医学生・医師・医療関係者に自分の身体でお役にたつ」の強い想いからでした。

最後に大澤会長から先輩献体者の成願に先輩成願者に成り代わって「本当にありがとう」の言葉で感謝し、二千名余の献体登録者の想いを語りました。それはご自分の人生を含め多くの献体登録者が「良い医師を・医療関係者を育てる」ためには、無条件・無報酬の「献体」こそが必要だと認識し、死後の自分の身体で医師・医療関係者の未来を支え、良い医師・医療関係者になって「医は仁術なり」を心に「成長してほしい」と結び、若い医学生にエールを贈りました。

ガイドンス終了後、医学生は地下の解剖実習室に移動し、実習が開始された。

（鈴木和男）

## 医学部学生感想文

平成三十年度は医学部二年次の学生  
一二十一名が肉眼解剖学実習に参加し、  
一月七日に納棺式が行われました。学生  
の皆様の感想をいくつかご紹介いたしま  
す。

解剖学で使用している専門用語(※)  
については次ページをご覧ください。

### 献体して下さった方に 感謝の気持ちを込めて

岩崎 真奈

献体をして下さった方とそのご遺族  
の皆様、そしてそれを支えて下さって  
いる白菊会の皆様に心から感謝しており  
ます。私たちに貴重な機会を与えていた  
だき本当にありがとうございます。初  
めてご献体と対面したとき、この方は自  
らの体を使って私たちに学ばせてくれる  
のだと思います、私はその気持ちに応えなけ  
ればいけないと気が引き締まりました。  
そして一生に一度の解剖実習を共にする

ことになったご献体のおじいさまとご  
縁を大切にしたいと思いました。この初  
めての対面は強く心に焼き付いており、  
忘れられない瞬間です。

私はこの解剖実習で大きく分けて二つ  
のことを学びました。まず一つ目は人間  
の体がいかに複雑で緻密にできているの  
かということ。そしてその複雑な構  
造にはちゃんと意味があるということ。を  
知りました。人間の体は正しく機能する  
ためにとっても精密な構造をしていました。  
ご献体で実物を確認し、その緻密さに何  
度も感動しました。人体の構造は複雑な  
だけに、本で勉強してもなかなかイメー  
ジが湧かず苦労しました。実際、本で予  
習をしていったものと実習で見た実物は  
かなり違っていることが多かったです。  
\*アトラスや教科書を何度読んでもわから  
なかった部分も、実物を見て触れて学ぶ  
ことで格段に理解度が上がりました。ご  
献体はどのアトラスや参考書よりもわか  
りやすい最高の先生でした。実習で見た  
構造は画像として頭にしっかりと残りまし  
た。

二つ目は医学生としての自覚です。解

剖実習は、自分が将来医師になるという  
ことを強く意識させてくれました。いま  
では授業を受けている時以外は、医学に  
ついて考えたり意識したりすることはあ  
りませんでした。しかし、解剖実習が始  
まってからは常に頭のどこかに解剖実習  
への意識があつて、普段の生活でも医師  
になるということについて考えるようにな  
りました。医師という仕事は、いつも  
人を相手にする仕事ですが、解剖がその  
第一歩であつたように思います。解剖は  
人を相手にしているゆえに学ぶ側には真  
摯に取り組むという責任が伴います。今  
までの教科書や本と向き合う勉強とは異  
なり、人を相手にする勉強や仕事は相手  
に対する敬意が必要です。半端な態度で  
は相手に失礼になってしまいます。この  
点において、解剖実習は今までの授業や  
実習とは大きく異なりました。自分本意  
ではいけないと感じました。このことを  
初めて意識できるようになり、医学生と  
して成長できたと思います。

これから四年間しっかりと勉強し、こ  
の解剖実習で経験させていただいたこと  
を無駄にしないようにします。

やはりご遺体が先生

岡本 和也

初めに、今回の肉眼解剖学実習においてご遺体を献体してくださった皆様、そしてご遺族の皆様、また千葉大学医学部環境生命医学教室の先生方、我々医学生への解剖学実習に携わってくださったすべての方々に深く感謝申し上げます。貴重な経験をさせていただいて本当にありがとうございました。

医学部生の第一ステップともいえる肉眼解剖学実習は、私にとって本当に貴重な経験となりました。それはこの実習を通して学ばせていただいたことが、実際にご遺体を解剖させていただくことである、人体の正常構造はもちろんのこと、ご遺体に対してくださった方、ご遺族の方の献体に対する思い、そして四人のチームで行う実習における協調性などのチーム力、といった様々なことだったからです。去る一月七日、納棺式を行い三か月の解剖実習が終わりましたが、始まる前の自分とははるかに違う成長した自分がいることを実感しました。

実習においてご遺体は私たちの先生でした。先生はこの三か月間たくさんの方を教えてくださいました。私たち二年生はこれまでの授業で人体の機能は教わってきたものの、その多くが断片的であまり実感のわからないものでした。しかしこの実習を通して初めて、人体の構造という、何と表現すればいいのか難しいですが自分にとって「リアル」で、もちろん医学という分野の根幹部分を初めて学ぶことができ、解剖学の知識が広がっただけでなく、今までの断片的であった知識も「あの話はここでつながっていたのか!」といった発見から整理されていきました。それだけではありません。数年前に白菊会の皆様からの寄付により実習室に設置されたモニターが授業で大活躍しました。モニターに映し出されるCT画像やMRI画像も組み合わせることで、立体的な人体構造の理解が進むだけでなく、実際の病気を学んでいくこれからの授業につながり、さらに遠い目で見れば医師になった将来でも役に立つことを理解することができました。他大学の医学生と話す機会が多くあります

が、ここまで実習の環境が整っているのはすごいなと率直に思うと同時に、その充実した環境で実習を行わせていただけて感謝の思いで溢れます。

ご遺体の先生から教わったのは、知識



解剖学で使われる用語の解説

アトラス……解剖実習で使用する人体の図譜のこと

ライヘパック……解剖時に御遺体を納める袋のこと

破格……奇形ではなく、正常の範囲内であるものの、通常とは違う走行を示す神経・血管や臓器などのこと

同定……神経や血管などの名前を特定すること

走行……神経や血管などの位置や連続性のこと

だけではありません。「献体の思い」も教わりました。医学教育発展のために無条件・無報酬で献体をしてくださるといふ「善」の精神に感謝をし、三か月間実習をさせていただきました。私は納棺式の日、ご遺体の先生を前にして、「先生の生前の思い」に応えることができた、と心の中で思いました。この思いが天国の先生へと届いていることを祈っています。

「先生、ありがとうございます。心からご冥福をお祈りいたします。」

## 献体の精神への敬意

小川茉莉奈

まず初めに、私達医学生の学びのために無条件・無報酬での献体を決断なさった全ての方々、そして同意して下さった御親族の皆様にご心より感謝申し上げます。

私が医学部の解剖実習の存在を知ったのは、将来どんな学問を学びたいのかも定まらずに漠然と日々勉強をしていた高校二年生の頃でした。知人の医学生の話聞いて、弱冠二十歳前後の学生が人体

の解剖という極めて貴重で特別な行為を許されるということに驚き、憧れを抱きました。その憧れは人体への純粹な興味と、ごく僅かな人しか経験できない刺激的な経験というものへの興味から来るものだったと思います。その当時から実習前、千葉白菊会の方々のお話を伺う機会まで、解剖に対する私の認識はそのようなものでした。

白菊会の方のお話で、私は初めて献体登録なさっている方の人生観、登録の決断に至るまでの過程というものに触れました。それまで解剖を行う自分たち医学生側のことにしか目を向けていなかった私にとっては新鮮なお話であり、身の引き締まる思いがしたことは忘れません。

そしていよいよ明日から解剖実習が始まるという日、緊張していたのかどこか落ち着かなかった私は、白菊会の方に頂いていた『私と献体 会員の手記』を読みました。そこには白菊会の方に直接伺ったお話とはまた違った、本当に多種多様な献体への思いが記されていました。御自身や御家族が現代医学の進歩に救われた経験から恩返しをしたいとお考えに

なった方、解剖実習に必要な献体が不足しているという報道を知り医学教育への貢献を決断なさった方……献体することが御自身への最高の贈り物、と表現している方もいらっしゃいました。皆様は各々の尊い意志や理由を持って献体を決断して下さることを実感し、献体の精神へ敬意を払うことの必然性について改めて考えることができた時間です。

実際に解剖実習が始まってからも、御遺体の先生の人生背景を大切に考える時間が度々ありました。まず、毎回の実習の始めに黙祷をし、御遺体が収まったライヘパックのジッパーを開ける瞬間。

実習担当の先生が「献体の精神に敬意を表して」と仰る度に、単なる人体としてではなく、一つの人生を生き医学への貢献を決断なさった誇り高い人間としての御遺体の先生について考えていました。そして、御遺体から教科書上の一般的な構造とは異なる破格<sup>\*</sup>と思しき構造物や人工物を同定した際にも、他の班の御遺体と見比べたり見に来てくださった担当の先生のお話を聞きながらその背景を想像しました。各御遺体の個人情報は一切知

らされない上、まだ医学知識も浅い私達には言葉通り想像しかできなかったのですが、将来的に臨床をする上でも患者のバックグラウンドを考慮することがいかに大切かということを実感しました。

この三ヶ月間の実習を通して御遺体の先生方から教わった沢山の事の中で、医学の道を進む上で私が特に意義を感じていることがあります。私たち医学生が学びは、多くの人が様々な人生経験を経た上で辿り着いた医学への奉仕という決断に支えられているということ。そして、今自分が向き合っている身体の目に見えない背景を考慮することの重要性です。これらのことを教えていただいた感謝と敬意の気持ちを原動力に、今後も精進していきたいと思えます。



## 良い医療者とは

小林 秀輔

三か月にわたる肉眼解剖実習が終わりました。解剖実習の雰囲気などは先輩方からうかがっていたものの、実習に臨む前まではご遺体の先生を前に滞りなく実習が進められるだろうかという不安と緊張感を感じていました。初めて、対面したご遺体の先生は非常に穏やかなお顔をしており、その瞬間を忘れることはできません。初めてメスを握ったとき、「今から自分たちがメスを入れるのだ」という事実を強く認識するとともに、自分たちが医学部の学生であること、将来的に医療者になることの重みを痛感させられたように感じます。

実習は体表に始まり、内臓、そして頭部と神経系にまで及びました。初めて目にする血管、筋肉、神経に戸惑いを覚えつつも、人体の神秘に医学的関心を掻き立てられたのを覚えています。実習に際しては毎回予習をして臨んだのですが、実際に目にする人体の構造は教科書とは僅かに異なり、そしてご遺体の先生ごと

に違いました。もちろん、生前のご病気の痕跡も克明に残っていました。人体とは、内臓、血管、神経などが非常に複雑かつ有機的に結びついていきます。機能不全が生じてもうまく互いに補い合うことができる部分もあれば、代替が全く効かない部分もあります。そして、それは教科書を通して「知識」として学ぶことはできても、「人体の一部」としての真の理解はこの実習を通してでないと、決して分からなかったことだと思えます。

この実習を通じて、私たちは献体してくださった先生方から非常に多くのことを学ばせていただきました。それは臓器の位置関係や血管、神経の走行<sup>\*</sup>といった解剖学の理解のみならず、互いに価値観の異なる班員同士で協力して解剖にあたるコミュニケーション力や自分たちが将来的に医療者になるという自覚まで非常に多岐にわたります。「自分たちが先生方に恩返しできることは何か?」と考えたとき、それは将来的に「良い医療者」となることだろうと感じています。この実習が始まる前、「良い医療者」の定義は私の中で曖昧なものでした。知識をもつ

こと、患者・家族に寄り添えること、仕事場でコミュニケーションがとれること、どれも大事なのは分かりますが、何が一番大事なのか答えが見つかっていませんでした。しかし、この実習を経て、私は、「良い医療者」とは患者およびその家族の気持ちを抱き取ることができたうえで行動ができる人間だと考えています。「医療は仁術」という言葉がありますが、医療者というのは周囲の人間に支えられている存在だということをこの実習で学ばせていただきました。

最後になりますが、ご献体に応じてくださった故人とそこご遺族、千葉白菊会の方々、ご多忙のところ熱心にご指導してくださった先生方、そして貴重な実習の機会を与えてくださったすべての方々にこの場をお借りして感謝を申し上げますと思います。本当にありがとうございます。



## 解剖を通して 教えられたこと

羽田 幸祐

生前、医学の教育及び研究のために献体することを決意された故人と、その遺志に同意された肉親の方々へ、尊敬の念を表します。また、この度の解剖学実習を通して、ヒトの身体の成り立ちについて非常に多くのことを学ばせていただいたことに、献体の先生へ心より感謝を申し上げます。

解剖学実習は三ヶ月間という短い期間ではありましたが、班員の仲間と協力しながら、献体の先生と向き合うことができたことは、今後二度と得ることのできない大変貴重な経験でした。生前、医学教育のために役立ちたいと志した献体の先生のご期待に応えることができるよう、本実習で学んだことを基礎として、これからの医学の勉学に励みたいと考えております。

本実習で最も印象的だったことは、身体構造の様々な変化や変異について学ぶことができたことです。加齢や疾患、生

前の生活によるものと思われる組織・臓器の様々な変化や、解剖学的な破格は献体の先生のいたるところにみられ、教科書、図説等で説明される人体の構造が平均化、単純化されたものであることを改めて教えていただきました。医療の現場では一人ひとりの患者に対して最も適切な医療を提供することが重要である以上、患者それぞれが個別に有する背景について強く意識しなければなりません。このことの重要性を改めて気づかせていただいたことを今後も大切にしたいと思っております。以上のようなことから、解剖学実習のはじめに環境生命医学教室の先生から頂いたお言葉のとおり、「献体の先生は人生最高の師である」ことを確信しています。

最後に、環境生命医学教室の先生方に対し、多大なご支援、ご協力を賜りましたこと深く感謝いたします。三年次学生編入学のため、二年生対象の講義への参加が困難であることや、実習のコマ数に限りがあるなどの制約もありましたが、編入生向けに特別講義を設けていただけましたことや、実習中もとりわけ丁寧にご指



2019.1.7 納棺式

導いただけたこともあり、特段の支障もなく実習を進めることができました。さらに本実習中では、解剖台に備え付けられたTVモニターでCT、MRI画像を見ながら、小テストを解くことで解剖の要点を学ぶという工夫が取り入れられており、環境生命医学教室の先生方が毎回、綿密な計画と入念な準備の上でこの解剖学実習に取り組まれていることに、医学教育にかける心意気を強く感じておりました。このような素晴らしい設備と環境の中で解剖学実習に臨むことができことに改めて感謝いたします。

## 医師としての素養を学ぶ

吉良 槇一

この三ヶ月間、肉眼解剖学という科目の中で実習に従事してきたが、実際に学んだ内容は解剖学の範疇をはるかに超えるものであった。実習に先立つガイダンスで「我々がこれから行う実習は、人体にメスを入れハサミで切るといふ、一つ間違えれば罪になるものである。」という言葉聞いて緊張感を覚えたが、それでもなお「困ったら教科書を見直して、講師の先生方に教えて頂こう。」という受動的な姿勢であった。

しかし最初にメスを入れると、手が止まってしまった。あると予測していた場所に血管や神経が見つからないのである。教科書を見直しこの先にあるはずだと考えながら手順を進めたが見つからず、諦めざるを得なかった。その後も図譜通りの位置関係にない血管や想像よりはるかに薄い膜などを見て、人体の構造の繊細さや多様性に驚きつつこの後の実習に対する不安も感じた。実習を終えて復習をしていると自身が執刀医として手術に臨

む光景が浮かび、同時に実習の中で狼狽している自分も思い起こされた。

私はこれからの実習にどのような姿勢で臨むべきなのか、改めて考えた。実習の中で起こる「教科書とは違う事」は実際の手術中にも起こる。そして「見つからないため諦める」というのは手術の中止を意味し、患者は最悪の場合死に至る。医師がそのような姿勢でいることはあってはならない。この実習は解剖学の知識を得るだけでなく、想定外の状況に対応する力や適切な思考など「医師としての素養」を学ぶ貴重な機会であるという結論に至り、実習に対する姿勢を改める必要性を痛感した。

その後の実習でも困難な状況が生まれ、その後の仲間とその度に助け合った。探している組織が見つからない時は全員で図譜や教科書を見ながら話し合い、できる限りそれを同定する。行程の進みが早く混乱してしまった時は立ち止まって復習し知識を全員で共有する。モチベーションが揃わない時でもコミュニケーションをとって足並みを揃える。毎実習で達成する事は難しかったが、班が一つ

の「医療チーム」として活動することができたと思う。

そして最も大切なのは、これらの事を教えてくださったご遺体の先生という存在である。人体の構造に関する知識やその多様性に始まり、医師になる上で持つべき倫理観や姿勢、理想的なチーム医療のあり方やそれらを実現するために自身がなすべき事、数え切れないほど多くのことを教えていただいた。かけがえのない教えを通じて私に医師への道を開いてくださった先生に心から敬意を表し、思いを新たにその道を進んでいこうと思う。



2019.1.7 森先生「献体の碑」への献花

## 解剖学実習から得た学び

平島 哲矢

二〇一八年十二月、約三ヶ月に亘る肉眼解剖学実習を終了しました。この場をお借りして、ご遺体の先生やご遺族の方々、白菊会の方々に感謝を申し上げます。誠にありがとうございます。また、実習の準備やサポートをして下さった教職員の方々にも重ねて御礼申し上げます。

解剖実習が始まるにあたって行われたガイダンスにおいて、白菊会の方から「献体登録の動機」をお聞きしました。そこで印象に残っているのは、お話頂いた方（献体登録された方）は当初、ご家族から献体登録に反対されていたということでした。そして、そこで登録を諦めるわけではなく、ご家族の説得に奔走され、最終的に同意を得て登録に至ったという点です。恥ずかしながら献体登録に無知だった私は、献体登録にご家族の同意も必要と知りませんでした。医学の発展のために究極のボランティアをしてくださるのは、ご遺体の先生だけではなく、そのご家族の意向も含まれている、すなわ

ち、私たち医学生は想像しているよりも遥かに多くの方々の献体精神の上で学ばせて頂いているということに気づかされるところにも、それだけ大きな期待をされており、責任があるのだと実感しました。

私は三年次編入で入学したため、他の二年生とは異なり、臨床講義と同時並行で肉眼解剖学実習を行いました。同時並行なのでスケジュール的には大変でしたが、その分多くのことを学ぶことができました。まず、肉眼解剖を通じて、人体の正常構造を学びました。初めてメスを握って解剖を行ったとき、一般的な大学生ではなく、「医学生」となったことを深く実感したのを今でも覚えています。各臓器が人体のどこにあるのか、動脈や静脈、神経はどのように見えて、どういった走行をしているのか、筋肉や骨は何となくイメージできる気がするが、実際はどうなっているのか等、学ぶことの多さに圧倒されることもありましたが、ご遺体の先生に教えていただくことは全て吸収する意気込みで取り組みました。また、臨床講義において各臓器毎の疾患を学んでいたため、どの臓器のどこに異常が生

じるとあの疾患になる、といったことも  
ご遺体の先生に教えて頂くことができ、  
実際の医療現場で役に立つことも多く学  
べました。臨床医になってからも一度  
解剖実習を行いたい、という希望を持つ  
医師が多く存在するという話を聞きます  
が、その気持ちがかかったような気がし  
ます。まだまだ未熟ではありますが、疾  
患を学び、それを念頭に置いた上で肉眼  
解剖学実習に取り組めたことは、将来、  
良い医師になるための大きな財産になっ  
たことを確信しています。この経験を胸  
に、ご遺体の先生やご遺族の方々の期待  
に沿えるよう、良い医師になることを目  
指して今後も精進していきたいと思いま  
す。本当にありがとうございます。

### 知識とチーム力と心構え

山下 雄大

十月から約三カ月間行ってきた解剖実  
習が終了しました。ご献体いただいた  
方々やご遺族の方々、指導してくださっ  
た先生方等、携わって頂いた全ての方に

感謝を述べたいと思います。ありがとう  
ございました。私が今後生きていく上で  
非常にいい経験になったと考えておりま  
す。

解剖実習を振り返ったとき、大きく分  
けて三つのことを学んだと考えておりま  
す。

一つ目は、解剖学の知識や技術です。  
教科書を読んでいるだけではわからない  
ようなことも少なくありませんでしたし、  
すでに理解していたところもより深い知  
識を得ることができました。また、わず  
かではありますが手の使い方や器具の用  
い方も上達することができたと感じてお  
ります。

二つ目は、チームの力です。解剖実習  
では、事前に教科書で勉強していても実  
際は全然違うようにみえることがほとん  
どでした。そこで相談できるチームメイ  
トがいたことは非常に心強かったです。  
どうするべきか話し合い、意見を言い合  
うことでより良い判断ができたと思いま  
すし、勉強になりました。これは医師に  
なった後も大切にしなければいけないと  
考えています。最近医療ミス等が問題視

されていますが、あまり周りと相談せず、  
一人で結論を急いでしまったのが原因、  
という例もあるようです。自信があると  
きでもないときでも、チームメイトとよ  
くコミュニケーションをとってミスをな  
くしていきたいと考えています。

三つ目は、医師としての心構えです。  
私は解剖実習を通して不安な気持ちを  
持つていました。解剖実習が始まる前は  
自分がうまく出来るかどうか、という不  
安でした。しかし解剖を続けていくにつ  
れ、自分の学びがご献体の方々に納得し  
ていただけれるレベルに達しているのか、  
という不安が変わっていききました。今思  
えば最初の考えは自己満足なようにも思  
えてきています。実際に私の学びが充分  
であったかどうかは分かりませんが、今  
後患者さんを診るようになった時、自分  
が納得するだけでなく患者さんに満足し  
てもらえるよう、自己を高めていきたい  
と感じました。

当然のことではありますが、自分には  
まだまだ知らないことがたくさんあり、  
人として未熟であると再認識させられた  
ような気がします。今まで学んだことを

書いてきましたが、私にとっては、精神的な面が圧倒的に大きかったです。最後になります。医師として、人として一回り成長させてくださりありがとうございます。ありがとうございました。より良い医師になれるよう今後ますます努力してまいります。

## 先生から頂いた 二つの宝物

中熊日奈子

十月五日、三限。初めてご遺体の先生とお会いした瞬間、私の中には二つの感情が同時に渦巻いた。一つは漠然とした不安。もともと不器用で、中高の家庭科の実習では居残り常連だった私が、今からメスを手にしてこの目の前の先生を解剖するのだと思うと足がすくんだ。そしてもう一つの感情は感謝。医学の勉強に役立ててほしいという願いを込めて献体して下さった先生には本当に頭が下がる思いでいっぱいであった。

あれから約三か月。解剖が進むにつれ、当初抱いていた不安は払拭され、感謝の

思いが日に日に増していった。そして納棺式を終えて感じたこと、それは先生の解剖を通じて、私自身二つのかけがえのない宝物を授かることが出来た、ということであった。

一つ目の宝物、それは「豊富な医学的知識」である。やはり机上と実習とでは得られる情報量が格段に違う。実際に生身の先生に触れ、そのにおいを感じ、メスやハサミを用いて細部まで目で観察するといったように五感をフル稼働させることで、人体に関する知識を多角的に習得する事が出来たように思う。この実習を通じて得た一つ一つの知識を大切にしていきたい。それらは将来医療現場において必ず私を助けてくれると信じている。

もう一つの宝物は少々抽象的であるが、「個人の尊厳」に基づく倫理観である。ご遺体の先生方には一人ひとり異なる人生があり、いつも目の前にいらっしやうした私たちの先生にも先生だけの人生があるはずである。言葉という手段によって先生の生い立ちや人となりなどを知る事はもはや出来ないが、解剖を通じて目にする臓器や血管、神経などから人生を想像

することは可能なのではないか。この肺で呼吸をし、この臓器で食物などを消化・吸収し、またこの両手で日常生活における様々な動作を行っていたのだ等と思いをはせると、先生が生きてきた人生が垣間見えるような気がしてならないのである。このように、ご遺体の先生にも一生に一度きりの人生があったのだと自覚することは、他者を一人の「ヒト」とみなし敬意を払うための第一歩なのではないだろうか。そして、この敬意こそが個人を尊重するという倫理観につながるのではないか。今後患者さんをはじめとする様々な人々に接する際に必要不可欠な姿勢を先生から学ばせていただいたと感じている。これら二つの宝物には、先生方の私たちに向けた様々な思いが内包されているように思う。先生方の意志をしっかりと受け止めて、将来立派な医師になれるよう日々邁進していきたい。

最後にご献体して下さった先生方そしてご遺族の方々、また実習の機会を与えて下さった医学部の先生方とご遺体を提供して下さった白菊会の方々に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

## 肉眼解剖の意義

松下 華子

先日、約三ヶ月にわたった肉眼解剖実習を終えることができました。解剖実習を行なっているときは長く感じた期間でしたが、今思えばとても短かったように思います。そして、とても貴重で将来に繋がっていく経験をさせて頂いたご遺体をはじめ白菊会の方々、実習を支えていただいた先生方にとても感謝しています。

医学部に入ってきた人はほとんどそうであると思うのですが、私は人体に興味があり肉眼解剖は今まで見ることができなかった体の中を細かく観察できるという事で一番楽しみな実習でした。実習が始まる前までは楽しみな気持ちしか持っていませんでした。しかし始まってからは、ただ自分の興味や楽しいという気持ちだけではいけないという事を痛感しました。実際に解剖が始まってご遺体を前にした時に、この方々はついこの前までは生きていらして私たちと何も変わらない同じ「人」なんだということを改めて強く感じました。そこから解剖をや

らせて頂くことが沢山の方々の尊い御意志の上に成り立っているか理解しました。その上で自分が出れることは、必死に解剖を行うだけでは足りないなと思いました。献体してくださった方々は、将来の日本の医療の発展のためにと私たちに大切な体を提供してくださいます。ということは解剖を行うということは、もう自分たちは医者になるのだという強い意志を持たねばならないと思いました。正直将来へのビジョンはそこまで明確には持っていませんが、自分は医者になるのだということを強く自覚してこれから行動していかねばならないと痛感しました。解剖実習は自らの意識を変えることもできた何にも代えがたいとても貴重な経験でした。

そして、解剖を終えた後に白菊会の方々主催してくださった慰労会に出席しました。実際に献体の意志を示している方々とお話しして、全ての方の人柄が本当に素晴らしくて感動しました。私が話した方は、社会のためにずっと働いて素晴らしいことをしていらしたにも関わらず、「自分のやってきたことなんて医

者に比べたら」と、とても謙虚な方でした。しかし私からしたら、将来の医療の発展という成果が直接的に目に見えるのは難しいゴールのために自分の体を提供するのは並大抵の人には絶対にできないことであり、その決断ができたことは言葉にはできないほど尊いことだと思います。そんな尊い御意志があるからこそ日本の医療はここまで発展したのだなと実感しました。そんな尊い御意志に恥じないようにこれから頑張っていきます。

最後に、ご遺体の方、私たちが医者になる上で一番の先生になってくださりありがとうございました。この感謝の気持ちは絶対に忘れません。思いやりがあり沢山の人を救える医者になれるように日々精進いたしますのでどうか見守っていて下さい。



— 肉眼解剖学特論とは —  
**医師以外にも非常に重要な役割を持つ解剖学**

環境生命医学 特任助教 松山 善之

肉眼解剖学特論は、二〇一〇年度から二年に一度開講する三日間の集中講義の事です。対象は主に修士課程の大学院生であり、二〇一八年度は四十一名が受講しました。医学部で医学生を対象として行われる三ヶ月間の肉眼解剖学と異なり、受講する学生は大学を卒業した大学院生です。大学院というのは、既に大学の学部を卒業した人だけが入学でき、修士課程二年、博士課程四年で構成されます。しかも細かい話ですが、修士課程には医学部卒はおりません。医学、薬学、看護学などの幅広い分野での専門的な研究を行う研究者の卵であることが特徴です。

講義・実習は短期間ですが、朝から夕方まで非常に濃密なカリキュラムとなっております。白菊会の紹介・会員による講話から始まり、解剖学の講義後に、すでに見学しやすいように解剖済のご遺体の先生を観察することで、その理解を深めていきます。学習の目的としては、人体

の構造の普遍性や個性、病気等による変化を洞察する能力を習得することとしております。大変ハードな解剖学特論ではありますが、受講生は非常に高い熱意を持って参加しており解剖学が医師以外に



も非常に重要な役割を持っていることを実感します。今後、受講生が今回学習したことを様々な研究分野に活かし、国民の医療・医学の発展に寄与することができれば環境生命医学教室としても大変嬉しく思います。

※ 昨年八月二十日～二十二日に行なわれた肉眼解剖学特論の感想を紹介します。

**受講者の感想**

人体のすばらしさと  
 明日の命

大学院生 西垣 美穂

この度は、ご献体くださいました皆様、ご家族の皆様、白菊会の皆様、解剖の授業をご指導くださいました先生方、ご準備くださったスタッフの方々、大変貴重な機会をいただき、誠にありがとうございます。

八月の後半の三日間、肉眼解剖学という授業においてご献体を通じ、医学に携わる覚悟や人体構造のすばらしさ、生命の尊厳について学ばせていただきました。

初日の講義で、千葉白菊会の会長様をはじめ三名の方のお話しを伺わせていただきました。皆様が白菊会へ登録された背景は、戦火を潜り抜け九死に一生を経たご経験や大病、ご家族のご献体の意思を受け継いだこと等、様々でした。しかし、皆様同様に「人の役に立つことが願いであり、献体になることを叶えてくれる人々に感謝します」と仰いました。想像したこともなかった、崇高な精神に触れたひと時でした。私は社会人学生なので、ご講演頂いた皆様は自身の両親に近いご年齢の様でした。自然と両親の姿が重なりました。田舎の葬儀をはじめとした風習、親族のことも考えると、白菊会に入会されるに至った皆様とご家族の方々の思いに始終感謝の気持ちで一杯でした。

この講義にむけ、千葉大学の博士課程に入学してから約一年半、解剖学の本を十冊以上買い込み、自分なりに勉強・イメージをし、当日できる限りご献体から学べるように準備をしてきたつもりでした。しかし、見ると聞くでは大違いでした。実際、ご献体にお会いさせていただ

いた瞬間は、自身でご献体で実習させていただく人間として果たしてふさわしいのか、急に申し訳ない気持ちがあふれ出て、数分気分が悪くなってしまうました。しかし、少しでも多くのことをご献体から学ばせていただかなければと思いなおしました。一ミリにも満たない細かな神経から全身の臓器・筋肉・骨格に至るまで、先生方は何度も丁寧に、凄まじい量の部位毎の名称や機能とともに人体の成り立ちを教えてくださいました。人体の部分ごとの実に機能的で無駄のないつくり、そのつながり、人体のすばらしさにとっても感動しました。教科書や写真で似た映像は見ていたはずなのに、まったく別次元で様々なことを理解し、感じさせていただいた時間でした。

また、私自身、数年前に若年性の希少癌で余命宣告をされました。今は完解していますが、当時は臓器やリンパ節も摘出し、死を覚悟しました。若年性のもとも進行が速い癌で、いまだに特効薬（抗癌剤等）は見つかっていません。主治医からは「医学の進歩のスピードは目覚ましいから、数か月・一年でいいから少し

でも長く生きてください。そうすれば新しい薬も出てきますから」と励まされていました。皆様のご献体がまさに、私たちが明日も生き続けられる、希望であると深く感謝しています。

これから、研究は何度もうまくいかないこともあり、めげることもあると思いますが、きつとそんな時、この三日間のことを、今後、生涯にわたって思い返すはずだと感じました。ご献体の皆様のご冥福をお祈りいたします。ありがとうございました。

### 机上の知識と肉眼解剖

大学院生 高村 隆

はじめに、このような貴重な経験をさせて頂きまして誠にありがとうございます。献体を提供して頂いた方々に感謝し、ご家族、白菊会の皆様、千葉大学、解剖学研究室の先生方に深く感謝申し上げます。

私は、整形外科にて理学療法士として勤務しながら大学院で勉強しております。私が常々感じる事は日々の治療では分か

らない事が非常に多く、患者さんにより良い治療が出来ているのだろうかと思問自答しております。

適切な治療、効果のある治療には正しい知識と技術が必要になりますが、肉眼解剖実習で大変重要な事を学ぶことが出来ました。以前は、解剖書や講習会にて絵や写真にて勉強してきましたが、献体にて実際の人体を観察すると大きさや質感、組織の厚みや色などどれをとっても理解出来ていない事に気付かされました。また、左右の名称がついている組織や臓器も実は、前後だったり捻れていたりと発生学や役割も含め理解しないと場所や名称のみでは何の役にも立たない知識であると痛感しました。只、机上で覚えるだけの知識ではいけないのだと教えて頂きました。実際の患者さんにどのように役立てる事が出来るかを考えながら学びました。

もう一つ大切な事を学ぶ事が出来ました。それは、命の尊さです。白菊会の方がお話された献体登録をした理由は社会や医学の役に立ちたいと話されていました。とてもシンプルで少し驚きましたが、

シンプルに思える事が素晴らしい事だと思えました。

お話された方々の中には壮絶な戦争体験、いつ死ぬかもわからないような過酷な人生体験などのお話をお聞きして胸が熱くなりました。私自身も人は生かされているのかも知れないと感じ、私の人生でここまで社会のため医学のために役に立ちたいと思えるのかを考える機会はありませんでした。自分自身もそうですが、家族であったならばどう考えるだろうか。二年間お骨にも会えない事を我慢出来るのかなど考えると結論は出ません。しかし、今回の経験や学んだ事を医科学研究にいかし、その後の治療へとつながるよう努力することを自らに誓いました。我々に学びなさいと語りかけているような献体の方々の顔は決して忘れることは出来ません。

私が献体登録を出来るまでもう少し期間がありますが、しっかりと考えられる人生を過ごしたいと思えます。

## 看護学部学生感想文

平成三十年六月七日、看護学部二年生（現三年生）約八十名が、人体解剖見学を行いました。

看護学部で指導を担当される小宮山先生（当会理事）は、環境生命医学のご出身であり、学生はしっかりと献体の理念を理解して見学に臨んでいます。二時間という限られた時間の中、積極的に観察を行いました。人体内部を初めてみる学生にとっては驚きと発見の連続だったようです。

### 手のぬくもり

オノノジュ 愛鈴

私は人体解剖の見学ができること知ったときからその日を楽しみにしていました。医学部しか解剖に関与することはできないと思っていたので、貴重な体験ができることを有り難く思いました。怖いとか不安といった気持ちはありませんでしたが、解剖室に入ってご遺体にかかけられて

いた白い布がめくられるときはとても緊張しました。

初めは、ノートを一生懸命とろうとしていましたが、臓器に触れて体で感じたほうがよっぽど学びになるということでもモを取ることをやめて、たくさん触れさせていただきました。初めて人の体の内部を見て、体の構造や臓器の大きさ、重さを感じ、今まであやふやだった人体のつくりを鮮明に頭の中でイメージできるようにするのが分かりました。臓器を見て触っているときは好奇心が勝り、一つ一つの臓器を単体で、ある意味、モノとして見ていました。しかし、手に触れたとき何か心がジーンとくるのを感じました。言葉ではうまく言い表せないのですがハッとさせられたというか、その人の生を感じました。「ああ、生きていたんだなあ」と。その手で食事をし、仕事をし、誰かの手を握り…、どんな経験をしたかは分からないけれど、誰かを愛し、誰かに愛されていたと思うと、臓器単体ではなく、その人のすべてを意識するようにになりました。そして、献体することの凄さに気付きました。

私は生命の活動が終わった後に体を開かれて他人に自分の内部を見せることができるか考えました。答えは否でしたが、将来、考えが変わるかもしれません、やっぱり、無傷で生きたのに最後の最後で体にメスを入れられるのは怖いと思います。私は改めて今回解剖見学できたことの凄さを想い、世の中でいったい何人の人が本物の人体内部を見ることができるとのか考えました。私は自分の目で人の全体を見た人間として、恥じないように生きたいと思いました。あんなに複雑で精密な作りをしている体をコントロールして何十年も生きること、それより前に生まれるということ自体が奇跡です。だから生まれてきた命を無駄にしないで精一杯生きよう、自分の体に感謝してもっと大切にしよう、他人のことももっと尊敬して大切にしようと思えました。

私は助産師になりたくて看護学部を選



びました。これから多くの命に向き合い、たくさん手に触れると思います。そのひとりひとりに対して出会えたことに感謝し、私ができる限りの看護をしたいと思えます。

たくさん体を見せ、触れさせてくださり、本当にありがとうございました。ご家族の方も大切な方を私達に会わせて下さり、ありがとうございました。多くの人の思いを胸に、立派な医療職者になります。

### 私達に託された思いと 死別を乗り越える家族への理解

甲斐 茉里奈

私にとって人の死は遠い存在であり、小学生のころに祖母の死を経験して以来亡くなった人を見ることはなかった。今回の解剖学実習や慰霊祭は私にとって、人の死について考えたり死と向き合うきっかけとなる体験であった。

解剖学実習は実際の臓器を見る貴重な経験であるので、実習にかける思いや期待が高まった状態で実習当日を迎えた。

実習の直前に献体についての説明を受けた。そこで、献体の精神や献体と臓器提供の違い、献体が家族に与える影響について理解した。「献体」という聞きなれない言葉を繰り返し聞きながら、私の頭の中では本物の臓器を立体的に見たり触れたりする事だけに意識が向けられていた。初めて、ご遺体の先生を目にした時は自分の考えの浅はかさを痛感し、先生に学ばせて貰うという気持ちがいよいよ強まっていくのが感じられた。始めは、想像していたよりも外見がそのままの状態を保たれていることに動揺してしまい直視することに抵抗を感じた。しかし、先程聞いた「献体」という言葉が少しずつ私の頭の中に思い出されていく中で先生が託した思いに目を向けるようになり、いつの間にか目の前にいる先生を受け入れて観察に没頭していった。先生は自らを捧



げて献体に協力している。今後の医療の発展のためを思って献体を決断した先生の思いを無駄にしてはならない。献体を通して私達は学びを深め、専門職として正確な知識と技術を身に付ける責任があると感じた。

慰霊祭に出席する中で、私は先生の家族について思いを巡らせていた。献体や臓器提供はどちらも本人の意思と家族の理解が重要である。そのため、献体を考える時には家族を切り離して考えることは出来ない。特に献体の場合は、遺骨の返還に長い時は三年程かかり、家族が死を受け入れるまでの段階は通常の死や臓器提供とは異なる。家族によって死の受け入れ方は大きく異なるが、身内の人の死を受け入れるということとはどの家族においても簡単な事ではないだろう。通常は別れを惜しんだり悲しみと葛藤しながら時間をかけて死を現実のこととして受け止めていく。献体に協力する場合は、葬儀を行うことは出来ても、その後ゆっくり別れを惜しむことは難しい。また、献体では火葬を家族自らで行わないという点で死を現実のこととして受け入れる

重要なプロセスが不足しており、死を現実のこととして実感できない家族もいるだろう。ご家族には事前によく説明を行い、献体について理解した上で協力してもらおう事で、そのような問題を少しでも回避することが求められるだろう。つまり、献体は無条件・無報酬だが家族を対象とした事前のケアやアフターケアを丁寧に行うことが重要となる。慰霊祭への参加を通して、患者さんの死は家族のものであるという事を改めて認識した。

解剖学実習と慰霊祭を通して専門分野を学ぶ中で重要な知識を身に付けると共に、専門職者としての自覚が高まった。これから先、死別によって残された家族と関わる際には、今回得た視点や感じた事を思い出して関わりたいと思う。

## 「死」からの学びを 「生きる」へ繋げる

横田 佳都

まず始めに、千葉大学看護学部の解剖見学実習を行うに当たり、ご献体いただいた先生方やそのご家族をはじめ、白菊

会の皆様、医学部・看護学部の先生方など、ご協力下さった全ての方々にご心より感謝申し上げます。

今回の解剖見学実習を通して自分の中で「死」というものの捉え方が変わりました。私は大学一年生の時、中学校時代の友達を亡くしました。いつも通りの生活を送っている時に突然友達の死を知らされ、全く受け入れることができませんでした。原因は脳出血。兆候も何もなく突然の死だったということです。中学校時代の写真を見返し、この子が死んだなんてと途方にくれ、いくら待っても返事のないメールに死んでしまったという事実を突きつけられました。葬儀の場に参列しましたがただただ胸が痛く、「死」とはこんなにも辛く悲しいものなのだと実感しました。

幼い頃からヒトの身体の構造にとっても興味があり、本などで臓器を調べたり、医療系のテレビ番組をたくさん観ていたので、今まで二次元だったものを三次元・四次元で観察できると知ったときはとてもワクワクしました。しかしそれと同時に、「ご遺族のことを考えると「死」

という言葉が頭に浮かび心が痛くなり、もし自分が遺族だったらと思うと、とても献体として提供できる気がしませんでした。

しかしざ実習を行ってみると、学び、得られたものは計り知れません。今まで教科書で学んできたこととの共通点や相違点はたくさんありました。例えば心臓から出ている大動脈の太さには本当に驚きました。教科書でも太いことは知っていましたが、想像以上の太さでした。また、腎臓が思っていたよりも背中側であり、そこも教科書で見えたものとは違うイメージでした。さらに、人によって同じ臓器でも位置や形が異なっており、個人差というものを感しました。二年生になつて看護基本技術で様々な技術を練習しますが、毎回先生方は猿真似をするのではなく、どのような状態の患者なのかよく考えて工夫しなさいと言います。初めて習う技術なのに工夫しろと言われても分からないと毎回思っていました。今回の実習を通して個人差というものを強く実感し、患者一人一人に異なる工夫が必要だという先生方の言葉がよく理解

できました。

看護師は様々な患者と関わり、その人にとつてベストな看護を提供することが求められます。一人として同じ人はいない。だからこそ、ヒトの身体構造を頭に入れ、その上で個人差があるということを理解してアセスメントを行う必要があるのだということを今回の実習を通して学びました。辛く悲しいだけだと思っていた「死」から、多くのことを学ぶことができ、医療従事者としてこの経験を「生きる」ことをサポートするために生かしていきたいと思えました。「死」に最も近い医療従事者だからこそ、「死」からの学びを「生きる」ことに変えていけるよう、これからも努力していきます。



## 医師にとって最適なカダバートレーニング 献体登録者の中にも広がる賛成の声



### 感謝！ 千葉白菊会が支えるクリニカルアナトミーラボ

千葉大学大学院医学研究院 環境生命医学 講師 鈴木 崇根



千葉大学に二〇一〇年に設立された「クリニカルアナトミーラボ」(CAL)についてお話しします。千葉大学では、医師もご遺体で解剖を学んでいます。「学生が勉強しているのだから、当然医師もしているでしょう?」、あるいは、「解剖を修めてから医師になるのだから、もう不要だろう」と思う方もいるのではないのでしょうか。いずれも事実とは異なりません。実は日本では医師に解剖資格がありません。そのため、大学を卒業すると日本では医師は解剖出来ないのではないかという疑念が払拭できない時代が続きました。また、解剖とは不思議なもので、学生でも、研修医でも、ベテランになっても常にそのレベルに合わせて学びたい内容・深さが変わっていきます。そのため、熱意ある多くの医師が診療を休んで海外へ渡航してまで解剖を学んできました。

私自身も、整形外科医になってから学生時代に学んだ解剖学が臨床の現場でまったく使えないことに気づきました。人体の構造を学びたい学生の視点と治療をしたい医師の視点がまったく違うのです。そのため、二〇〇八年にあった解剖学教室への異動の話は、私にとっては再び解剖学を学ぶチャンスが来たという嬉しい話でもありました。当時新しい手術にたくさん挑戦してましたので、ご遺体から直接学んだ事がどれほど手術で活かされたか一言では言い切れません。このような貴重な勉強の場を、私以外の医師にも与えられるべきだと考えるようになったのも、私の受けた感激がとても大きかった事を物語っています。

基本的な手術の教育方法はOn the Job Trainingといわれ、実際に手術をしながら教えてもらう方法です。最近の手術は創きずが小さく済む術式が増えてきましたが、この方法は手術の指導において大きな問題を抱えています。こういった手術は執刀医以外に患部が見えないのです。指導医の手術を直に見て学ぶことも、自分の手技を指導医が修正することも出来ません。

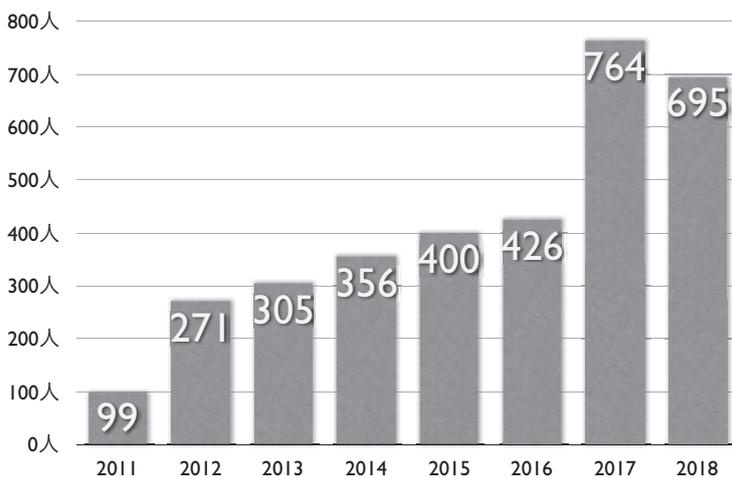
この解決策として、海外ではご遺体を用いて手術と周辺解剖を学ぶカダバートレーニングという方法が普及しています。これは、手術と同じ状況を作って学ぶシミュレーション教育のひとつです。手術では解剖を正確に理解し安全に遂行するだけで無く、想定外の事態が起きたときに瞬時に適切な対処までできる知識を持つことも重要です。カダバートレーニングでは、実際に遭遇する全ての構造を確認できる上、講師が経験した様々なトラブルとその対処法を具体的に学ぶ事ができるのです。

この優れたカダバートレーニングを国内でも当たり前前に実施できるようにしなければなりません。それが何よりも病に苦しむ患者さんの幸せに繋がるからです。当時、献体者は医学生のためだけに献体登録しているのだから医師には解剖させてはいけないという事をはっきり言う大学・解剖関係者も存在し、大きな壁を感じていました。そこで、本当に献体者は医師が解剖する事に反対するのだろうか？という不安を、直接千葉白菊会の役員会や総会で皆様に伺ってみました。すると次々と賛成の声が上がり、学生実習への献体が充足さえしていれば、勉強し

たい医師にも是非使って欲しいと満場一致で応援の言葉まで頂くことが出来ました。あのときの感動は学生教育改革とCAL運営の原動力となって私の中に生き続けています。

多くの皆様の同意の存在がきっかけとなり、学内での倫理審査委員会や大学執行部の承諾を得て、二〇一〇年秋に千葉大学でCALが誕生しました。その後、

CAL利用実績（参加人数）



厚労省、文科省、日本外科学会、日本解剖学会、他大学の有志とも連携し、二〇一二年「臨床医学の教育及び研究における死体解剖のガイドライン」(二〇一七年改訂)が発行され、法的な問題は払拭することができました。実はこのガイドラインには千葉大学での経験が多く反映されておりあります。

さらに、このような私たちの活動が評価され、昨年からは厚労省がCAL設置を支援するための予算を増額しました。その結果、それまでの十大学程度から一気に三十以上の大学にまでCALの設立が内定しました。献体を使った医師のための解剖教育を普及させることは、名実ともに国の方針となったのです。

実際に運用を開始した二〇一一年以降の利用者数は上図にあるとおりです。CALは、患者さんに最高の手術を受けてもらいたいという医師達の熱気で溢れ、すべての医師から感謝の言葉を頂いています。

千葉大学では、これからも献体という究極の善意による学びの機会を提供し、千葉県そして全国の患者さんに還元していきます。今後とも変わらぬご支援をどうかよろしくお願い致します。

## CALに参加した医師の感想

## 実践さながらの濃密な時間

茨城西南医療センター病院

河野 衛

第四回筑波・千葉Cadaver Workshopが二〇一八年七月二十九日に千葉大学医学部で開催され、脊椎グループの有志で参加しました。千葉大学整形外科頸椎グループの先生と共に、実践さながらの環境で手術手技・アプローチの勉強をさせて頂くことができました。

私が入った班ではまず午前、胸腰椎の前方アプローチの実践から始まり、展開における胸膜腹膜損傷のピットフォールや後縦靭帯骨化病変への前方除圧を意識した展開を学びました。午後からは、山崎教授による二通りの頸椎前方アプローチのご指導を頂いた後は、上位頸椎後方除圧固定の手技を学びました。筑波・千葉の大学の隔てなく若手への指導や、お互いに手術手技の議論を行ったりするなどの非常に濃密な時間を過ごし、予定されていた六時間があっという間に

終わってしまいました。

国内でこのような医師向けのカダバーセミナーを受ける機会はかなり少なく、今回で四回目となったこの会も、クリニカルアナトミーラボを運営され、整形外科と解剖学講座との架け橋となつて下さった鈴木崇根先生や、台風十一号接近による悪天候の中、準備して下さった古



矢丈雄先生をはじめとした千葉大学頸椎班の先生のご厚意に依るところが大きく、心よりお礼申し上げます。

最後になりましたが、ご献体を頂いた白菊会の皆様への感謝の念を忘れず、この経験を患者さんへ還元できるものへ繋げるべく、今後の日常診療・手術へフィードバックしていきたいと思えます。

## 難しい肺切除術で貴重な執刀経験

国立病院機構千葉医療センター 呼吸器外科

越智 敬大

私は二〇一八年九月に千葉大学において開催された呼吸器外科のクリニカルアナトミーラボに参加させていただきました。

この回のクリニカルアナトミーラボの内容は、肺動脈や肺静脈、気管支などの処理を伴う肺切除術について、呼吸器外科の先生方が若手の医師に対して指導するということでした。肺癌の手術では第一選択となる基本的かつ重要な術式ですが、大きな血管の処理が必要であるため対応を誤ると致命的になりえます。我々、

後期研修医は助手として本手術に参加することは多くありますが、執刀する機会はなかなか得られません。今回、この手術術式を実際に執刀させていただき、呼吸器外科の先生方からご指導をいただくことで、手技に関するコツや注意点、解剖学的な知識など、多くのことを学ぶことができました。助手という立場では手術の全貌をイメージするのは難しく、執刀する立場になって始めて気が付くことが多くあるということを実感しました。今後は、このクリニカルアナトミーラボで得た知識や経験、心構えを臨床の現場で活かし、患者さんに還元していきたいと思えます。

最後に、クリニカルアナトミーラボを準備、開催して下さった千葉大学呼吸器外科の先生方、クリニカルアナトミーラボを運営していただいている関係者の方々にこの場をお借りして御礼を申し上げます。そして、このような貴重な機会を与えてくださいました白菊会の皆様、ご遺族の方々にも心から感謝を申し上げます。この経験を今後の臨床に活かせるように精進して参ります。

## 千葉消化器外科手術セミナー に参加して

千葉県がんセンター 食道胃腸外科

星野 敢

私は現在食道外科を中心に外科医の仕事を行っております。歴史の古い外科医の仕事ではありますが、最近の技術、理解の進歩には目を見張ります。ダビンチというロボットを用いた手術も食道がんを含め多くの消化器のがんで既に保険適用とされ比較的一般的に行われつつあります。新たな術式の臨床応用も盛んであり、我々も日々研鑽を積むことが要求されます。当院においても、内視鏡（手術用カメラ）を用いた食道がん手術を開始することが二〇一八年秋に決定いたしました。これまで二十センチ程度にわたる右胸の切開創が必要だった食道がん手術が五か所か六か所程度の小さな孔で手術ができるという患者さんにとって大きなメリットがある術式です。しかしながらこれまでの眼で直接見て、手で臓器を動かす手術とは一八〇度異なる手術となります。当然、これまで胃がんや大腸がん



などで内視鏡を用いた手術を数多く経験しておりますが、食道がんに対しての手術は初めてのことで、経験豊富な他施設での手術見学を何度も行い、練習器具や、動物を使ったトレーニングなどを重ねて本番に備えておりました。しかしながら、やはりこのまま実際の手術に

取り組んでいいのかという不安はぬぐい切れませんでした。そんな際の今回のお誘いでしたので大変有り難い話であったわけです。セミナーでは、手術を行う体位も実際の手術と全く同様となります。

使用するカメラやモニター、手術器具も同様に準備をして頂きました。私が術者として行いましたが、多くの同僚の先生たちのサポートの甲斐もあり大変有意義に研鑽を積むことが出来ました。これまで多くの手術書や見学などで培ってきた知識の理解を深めることはもちろん、どうしても経験しないとわからないような細かいノウハウが明確になったものと考えます。今回のカダバートレーニングの甲斐もあり、現在実際に患者さんに対して内視鏡を使用した食道がん手術を千葉県がんセンターでも開始しておりますが、皆元気に退院されております。今回ご協力いただいた先生方はもとより、御献体頂いた白菊会の方々に対し深謝を申し上げます。カダバートレーニングは他には代えがたい研鑽の場になります。医療者だけでなく、一般の方々にもさらに理解が広がり、安全で確実な医療を提供する



ための重要な基盤となることに大きく期待しております。

### 千葉手・肘の外科研究会Cadaver Workshop 2018にご参加しつ

千葉市立青葉病院 整形外科

脇田 浩正

平成三十年十一月三日、四日にクリニカルアナトミーラボ (CAL) で開催さ

れました千葉手・肘の外科Cadaver Workshop 2018に参加させていただきました。講師の田中利和先生、國吉一樹先生、徳永進先生のご指導のもと、肘関節鏡、手関節鏡、手肘の解剖について学ぶことができました。今回は高性能エコーを導入していただき、Sonoanatomy (エコーで学ぶ解剖学のこと) と実際の解剖との比較を行うことができました。デモンストラーションでは細かな手技を大きなモニターで確認でき、関節鏡、エコー画像も鮮明に見ることができました。その後、実際にご遺体に向かい自分で手技を行い、指導医の先生方から適切なアドバイスのもと手技技術の向上、解剖理解を深めることができました。関節鏡に関しては私は実施経験がありませんでした。しかし、初歩レベルから教えていただき、自信を高めることができました。手技書や、教科書で得られる知識よりもご遺体から得られる経験の方が大変貴重であり有難いことです。今後の臨床に活用し、患者さんのために還元していくことを誓います。

医学教育発展のため、ご献体いただき



ました白菊会会員の皆様およびご遺族の方々に心より感謝申し上げます。  
 また、このCadaver Workshopを開催、準備していただきましたCALの鈴木崇根先生、千葉大学手の外科グループの先生、講師の皆様はこの場をお借りしてお礼申し上げます。

## 明日からの臨床に活かせる 講演・実習

函館中央病院 脊椎センター

渡辺 堯仁

平成三十年年十二月二十一日、二十二日と二日間にわたりCadaver Workshop in Chiba〈Spine〉～Advanced～に参加させていただきました。

初日は九段坂病院の大谷和之先生、鳥取大学の永島英樹先生の講演を拝聴し、二日目にはお二人の先生から直接ご指導いただき実習を行いました。実習では執刀はもとより助手としての経験も少ない腰椎の骨切り術・胸腰椎の前方アプローチを実際の手術では確認できない解剖まで含めて確認することができ、大変有意義な勉強をさせていただきました。

医学教育のためにご献体いただきました白菊会の皆様、大鳥精司先生、古矢丈雄先生、折田純久先生、稲毛一秀先生、牧聡先生、志賀康浩先生をはじめセミナーの運営にご尽力いただきました千葉大学整形外科の皆様、鈴木 崇根先生をはじめ環境生命医学のスタッフの皆様にはじめ

この場を借りまして深く感謝申し上げます。

この実習で学んだことを明日からの臨床に活かしていきたいと思えます。本当にありがとうございました。



# 解剖慰霊祭」開催 追悼の思い溢れる



文部科学大臣感謝状伝達式

第九十二回を迎えた「千葉大学医学部解剖慰霊祭」は、白菊会総会と同じ六月八日午後一時より、あのはな記念講堂で開催されました。慰霊祭にはご遺族やご来賓とともに医学部と看護学部、大学の学生、大学院生、大学関係者を含めおよそ五百名が参列。総会を終えた白菊会会員も席を設けて頂きました。

開会の辞に続き今年度解剖実習と病理解剖にお役立ちいただいた百二十九柱の「ご芳名奉読」がしめやかにおこなわれ、森千里教授による「ご芳名録奉納」ののち、参列者全員が御霊に心からの黙とうをささげました。

その後、祭式委員長の中山俊憲医学部長、徳久剛史千葉大学長から感謝と追悼の言葉が贈られ、ご来賓の挨拶が続きました。

# 第九十二回「千葉大学医学部 緑深い亥鼻山に感謝と



最後に登壇した学生代表・医学部三年生小林泰芽さんの「感謝のことは」は会場内に深い感動をもたらしました。慰霊祭の最後を締めつけたのは参列者による白菊の献花。アンドレ・キャニオンの葬送の曲が厳かに流れる中、御霊の安らかな眠りをお祈りしました。

慰霊祭終了後、会場ではご遺族の方々への遺骨返還式、文部科学大臣の感謝状伝達式が行われました。この間、医学部、看護学部の学生・教職員が講堂前広場に整列し、最後の一人が帰路につかれるまで、深い感謝の気持ちを表す丁寧なお辞儀で見送りをしました。

(水野)

## 解剖学実習終了後に懇談会を開催

～納棺式を終えたばかりの医学生たちの心に触れる～

年明けの一月七日、二か月余りに及んだ解剖学習を終え、納棺式をすませたばかりの学生を構内の学生食堂に招き懇談



懇談会：学生や教職員を前に開会の挨拶をする大澤会長

会を開いた。

懇談会に先立ち「献体の碑」の前で先ず森千里教授が拝礼され、大澤会長による献花、続いて学生は感謝の黙祷を奉げた。

その後、四十数名の学生と森教授をはじめ数名の教員も参加され鈴木和男理事の司会で会は進行した。千葉白菊会からは七名の役員が各テーブルに分散し、学生のグループに交わり茶菓を囲んで懇談を行った。学生たちとの語らいの中にはやはり開講時に披露した私たちの実体験からくる献体動機に話が及び、彼らが献体者に対して深い感謝の気持ちを抱いていることをあらためて知ることが出来た。その思いを大切にして今後、医師、医療者として成長されることを願った。

最後に鈴木崇根先生が白菊会の沢山の会員の皆さまへの感謝の言葉とこれからの学生を励ます言葉を述べられて会を閉じた。

(宇佐美)

## 医学部白衣式に大澤会長が出席



二月一日、千葉大学医学部の第九回白衣式が開催され、白菊会を代表して大澤会長が出席しました。試験に合格して初めての臨床実習を開始する医学生一二十九名に、来賓・教職員等が一人ひとりに白衣を着せかけ、これまでの努力を讃えると共に激励の言葉を送りました。真新しい白衣を着た医学生代表が壇上で誓いの言葉を述べました。



医学系総合研究棟の完成予想図

## 医学系総合研究棟が着工、竣工は令和三年 伝統と先進性が共存するデザインに

令和三年四月の移転を目指し、千葉大学医学系総合研究棟の建設工事が進められています。

現在の医学部本館は、昭和十二年（一九三七年）八月に附属病院新館として完成し、改修を経て昭和五十五年（一九八〇年）より現在の医学部本館となりました。

八十年を超える長い間、千葉医学の精神の下、我が国を代表する教育研究施設の一つとして、医学・医療界に有能な人材を多数輩出してまいりましたが、この度、千葉大学医学部が今後より一層発展し、次世代の医学・治療を担う「治療学」の創成を進めていくため、新棟の建設が決定したものです。

医学系総合研究棟の敷地面積は四千二百平方メートル、十一階建て、五階から十一階が実験・研究エリアであり、今までの以上の研究環境を確保することで、革新的な研究の創出が期待されます。

建物は、千葉大学医学部の歴史と先進性を表す外観デザインにこだわっています。低層部の外壁は医学部本館のタイル色と風合いを再現し、歴史の継承と重厚感を表現します。高層部は白系統色を基調とした縦ラインとし、先進性を表します。

また、現在建築中の附属病院新中央診療棟と渡り廊下で結ばれ、人やモノが安

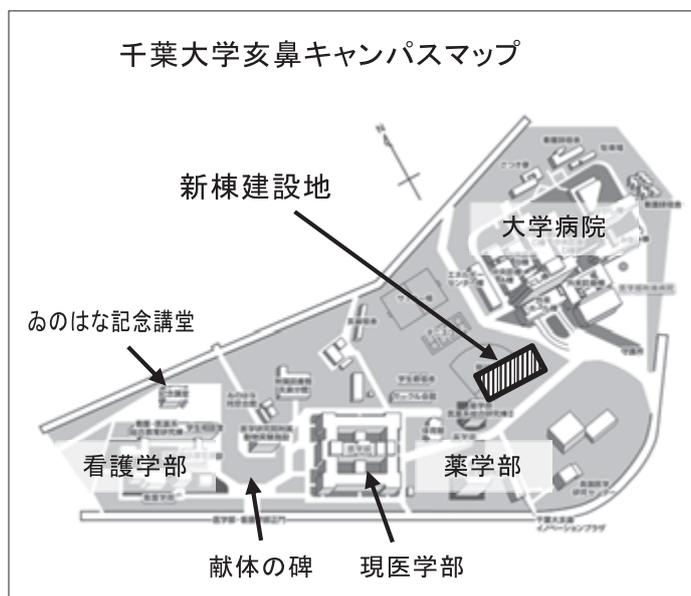
全でストレスなく移動できるようになります。

解剖学関連の施設は、一階に解剖実習室・献体保管室・CALなど、二階に環境生命医学・機能形態学、道路から直接进入する四階に献体事務室（千葉白菊会事務局）が設けられる予定です。

会員の皆様には、千葉大学医学部への献体活動にご尽力頂きありがとうございます。新棟に移りました後も皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。

（袖山前事務局長）

千葉大学亥鼻キャンパスマップ



千葉白菊会から三名が参加

## 篤志解剖全国連合会総会・研修会

### 初の同日開催

平成三十一年三月二十六日、篤志解剖全国連合会の第四十九回総会及び第四十三回団体部会・大学部会合同研修会が新潟市の日本歯科大学新潟生命歯学部講堂で行われました。千葉白菊会から大澤会長、鈴木（和男）理事、酒井の三名、千葉大学からは鈴木崇根先生と技術職員の間野陽太氏が参加しました。平成最後の会でしたが、初めて午前中に研修会、午後に総会という日程が組まれ、近隣県からは日帰りでの出席できる大会となりました。

研修会に先がけ第十一回篤志献体賞が新潟大学名誉教授・新潟白菊会理事長熊木古治氏に授与されました。

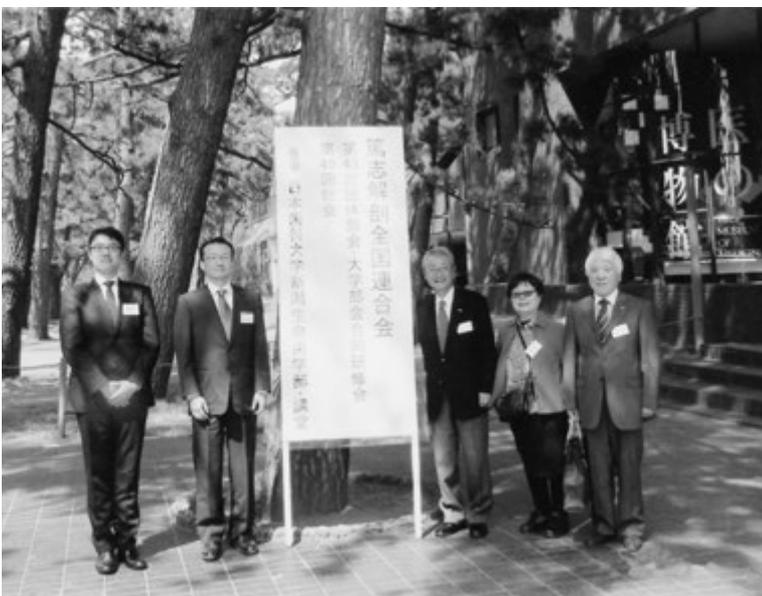
午前の研修会は、倉敷市の川崎医科大学による「篤志献体と医学教育」と成田市国際医療福祉大学による「新しい医学部の献体活動」の二つのテーマでした。初めに川崎医科大学の樋田一徳教授が

同大学の開校の理念「人間（ひと）をつくる、体をつくる、医学を極める」をかけた初代川崎裕宣理事長の話を紹介。続いて成田市の国際医療福祉大学の小坂淳教授が、「新しい医学部の献体活動」を講話されました。同大学医学部は、平成二十九年四月に新設された医学部です。開校の理念は「病める人も、障害者も、健康者も互いを認め合って暮らせる社会の建設をめざす」ことで、国際医療の担い手と地域医療の担い手として留学生二十名、日本人百二十名でスタートしました。

午後の総会には、全国から二百三十三名の参加者が出席、連合会会長の開会挨拶に続き参加者全員でこの一年間の献体成願者に黙祷を捧げました。開催大学挨拶に続き十六名の来賓挨拶と紹介があり、引き続き報告事項のあと協議事項として平成三十年度収支報告、監査報告があり、

次年度の事業計画案と収支予算案が提案され全て承認されました。

我が大澤会長が質疑応答で「千葉大では既に現役医師が三千三百人以上も献体で学んでいます。昨年の本会でも話題になり、取り組む大学も増加中という事ですが、連合会として何か報告するような流れはありませんか？」と質問すると、「今のところ報告する話はなく申し訳ない」との回答。来年に期待したい。（酒井）



# わが国で最初の医学博物館 資料は医・歯・薬の5,000点

## 医の博物館



《所在地》新潟市中央区浜浦町1 - 8  
日本歯科大学新潟生命歯学部内

### 《所蔵する主な古医書》

- ガレヌス「脈拍入門」(1550)
- 「ヒポクラテス注釈」(1552)
- 「浣腸と腹痛」(1591)
- A. ヴェサリウス「人体構造論」(1555)
- A. パレ「パレ全集」(1607)
- ヒポクラテス「ヒポクラテス全集」(1652)
- W. ハーヴェイ「血液循環論」(1673)
- P. フォシャル「外科歯科医」(1728)
- J. A. クルムス「解剖図譜」(1734)
- P. パッフ「人の歯とその疾病」(1756)
- 山脇東洋「蔵誌」(1759)
- J. ハンター「人の歯の博物学」(1771)
- 「性病に関する論文」(1786)
- 杉田玄白・前野良沢「解体新書」(1774)
- E. ジェンナー「牛痘の原因と作用に関する研究」(1798)
- 大槻玄沢「重訂解体新書」(1826)
- C. ダーウィン「種の起源」(1859)
- F. ナイチンゲール「看護ノート」(1860)
- 「病院ノート」(1860)

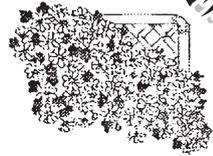
今回の総会会場(日本歯科大学新潟生命歯学部)には日本で最初の医学博物館があり、入って最初に見えるのはケースに並んだ五冊の解体新書です。十八世紀(一七七四年)に杉田玄白や前野良沢達が手にして外国の言語で書かれた本を翻訳し、出版した苦勞を思いました。当時は中国から伝わった漢方医学が主流で西洋からの医学は幕府の厳しい規制があったようです。西洋医学の概念が無い時代に洋書を読み解き、現代でも使われている医

学の専門用語を皆で考え、解体新書として世に送るまでの仕事はさぞ大変だったと思われます。館内にはすべて寄贈による江戸時代からの資料が並び、特に歯学部らしく、歯磨きをする婦人や、歯をヤットコのような器具で抜こうとする医者が描かれた錦絵が珍しく、また木製の入れ歯も展示されて短い時間では見学しきれないような博物館でした。

(酒井)

# 白菊の広場

## 私と献体



平成三十年度は九十一名の会員が加入しました。入会申込時に提出頂いた献体登録の動機をいくつかご紹介します。

### 初めて社会貢献をします

船橋市 田久保 友也

自分は二〇一六（平成二十八）年三月三十一日に定年退職をしました。自己満足かも知れませんが、大学卒業後三十八年間勤め上げてきたという充実感を感じました。また、人生の一区切りでもありました。

しかし、恥ずかしながら振り返れば自分のことばかりで、日本各地で大震災や豪雨災害が起きてボランティア活動を全くしないで過ごして参りました。六十歳代になって体力的に無理はあるけれど、何か貢献できることはないかと思うようになりました。

とある日、船橋市内の図書館の各種資料を置いてあるコーナーで某私立大学の献体に関するパンフレットを拝見しました。「献体の目的より良い医師の育成」の文字に、自分の身体が献体により貢献できるのではないかと思いました。ふと思いついたのは、二〇〇七年に公開された映画「眉山」で主人公（松嶋奈々子）の母親（宮本信子）が献体により大慰霊祭のシーンがよぎりました。こういう「人生の終い方」が自分に合っているかなと思え、献体を希望させていただきました。

### 原子に戻る前に 献体を希望します

市原市 森 眞一

私は、元々無神論者で、死ねば原子に戻るという考えの者で、靈魂等はまったく信じておりません。原子に戻る前に、学生さんたちの役に立つのであればその方がありがたいので献体を希望しました。医学生さんたちの役に立てただけであればと思います。よろしくおねがいします。

### 次代を担う医者のお達に使ってもらおう

八千代市 皆川 英治

人間も動物も同じように必ず死が訪れます。私の死生観として、人は死んだらただこの世から居なくなるだけ。死後の世界、天国とか地獄とか来世（あの世）などというものは有り得ません。

又、私には宗教的な考えは全くありません。ただ自然のままに生き、そして死ぬそれだけです。私はつねづね何らかの形で世の中のお役に立ちたいと考えてきました。人生も終盤に差しかけた今、庶民として出来ることは限られています。自分の身体について言えば、例えば臓器移植などは人間七十才を過ぎれば内臓もとつくに消費期限が切れていて使用には耐えないわけです。せめて次代を担う医者のお達に実習教材として自分の身体を使ってもらおうと考えた次第です。



医学生さんのお役に  
立ちたい私です

我孫子市 小西 典子

せめて死後に何かの役に立ちたいと思います。以前の仕事（精神科ケースワーカー）では千葉大出身の先生方の熱心なお働きに助けられましたので、医学を志す方たちの一助となればうれしいです。

## 総会のご案内

第三十九回千葉白菊会総会を

左記により開催いたします。

記

日時 二〇二〇年六月六日（土）

午前十時から

会場 千葉大学看護学部講義室

会員の皆様へは、三月初ごろ、総会のご案内をお送りいたします。

同封のがきにてお申込み下さい。

ラジオで永さんも  
話していた献体

君津市 杉原 幸江

私はラジオが好きでTBSの永六輔さんのお話が楽しみでした。その中で献体の話をされました。私は出来るかなと思っております。それから二、三年後にある方と出会い、色々な事をまなびました。その方も献体の話をされ入会していると聞きました。その方は亡くなられましたが「杉原さん、人のお役にたちなさい」と言われました。その方に大変お世話になり七月二十六日で八十才になります。今の所大きな病気もせず元気に一人で大好きな洋裁をラジオを聞きながらしています。献体が出来ますように願っております。

何か一つでいいから  
人様のお役に立ちたい

流山市 平尾 光枝

若い頃一時期教職にありました。六才台は保育所を経営しておりました。しかし教育を通じて社会に貢献していると

いう実感は持てずにいました。「献体」という言葉は記憶にないほど昔から知っていましたが、丁度教職にいた頃は、母が嫌がっていたので口にすることはありませんでした。遺体を切り刻むというイメージから脱しきれなかったのでしょうか。母の没後は献体を考えるようになりました。何か一つでいいからひと様のお役に立つという人生でありたいと思います。献体ならば一人のお医者様の成長過程でお役にたち更には大勢の患者さんのお役にたてる：欲深いですね。

養老先生の御本を読み、さだまさしさんの「眉山」を読みますます献体を希望する意志を固め、当時のくまもと白菊会に加入しました。このたび引越にに伴い、くまもと白菊会よりご紹介をいただき貴会に加入を希望する次第です。

### 会員からのお便り

館山市 小澤 知子

この度は、千葉大学医学部様にご挨拶がとうございます。生まれてから現在にいたるまで、何も御奉仕することもなく、

平凡な毎日をすごしてきてまいりましたが、少しでも皆様のお役にたつことができましたらと考えました。

どうか日本の医学界に少しでも役立つようにと考えておりますので、どうかよろしくお願いいたします。平凡な人間ではありましたが、最後に皆様のお役にたつて大変うれしく存じます。皆様のお言葉といたします。それでは皆様、どうぞよろしく願います。

船橋市 照屋 道子

献体登録の手続をして頂きありがとうございます。お手順をおかけして誠に申し訳ありませんでした。一時は諦めかけておりましたが、白菊会様から封書が届き本当にほっと安心しました。内容を確認しながら私も会員になれたのだと思いうれしくなりました。会報を隅から隅までじっくりと読み会員としての自覚をもってその日まで楽しく生きていきます。お世話になります。どうぞ宜しくお願い致します。



船橋市 渡辺 米

前略、御免下さいませ。総会会場へ伺って会長様始め皆様のお話をおききしているとお心がおちつくのですがなんと、いっても私、今年百才になりました。足、腰が痛くて伺う事が出来ませんので本当に残念でなりません。これは本当にわずかなもので申し訳ございませんがどうぞお収めくださいませ。会長様どうぞおからだくれぐれも気をつけられてお元気に。おす下さいます。よろしく願います。

市川市 齋藤 忠司

前略、梅雨入り宣言が有って、毎日降り続く雨、気象現象も過の時とは変わって来た様に感じているのは、私一人ではありませんでしょうか？ 私は親の死に齡「父四十二歳・母四十三歳」、私「五歳と七歳」は自分の死も親の死に齡近くにあると固く思い込んでいた。其れが七十八歳頃になっても身体の衰えは感じられず、健康に勝る幸せなし、毎日テニスに出かけ、若い人たちと一緒にプレイを楽しんでいたのです。

其れでも多少は、御仏に背を押されて

己の健康であろうか？ 神秘的現象であろうかと迷う自分でも有った。

或る時、健康維持過剰による事故に遭遇し、気が付いた時は、左足は石膏で固められベッドの上でした。齡を取ってからの大怪我の恐ろしさ！ 以来、此処其処と言わず襲う身体の不具合。「三年も過ぎ」から、見知らぬ誰かの下支えが有って此処まで来られた思いが強く、千葉大学医学部・白菊会に篤志献体を決意し、お願いした次第です。

六月八日（土）千葉大学医学部で、「献体を取り仕切る組織」白菊会の総会並びに成願者の合同慰霊祭に参列させて頂きました。

大澤國昭会長始め、スタッフ皆様の言葉を超えた気配りに、只々喜びと感謝の気持ちで心深くお礼申し上げます。

一方、医学生皆様の純粋な御心が、素振りから共感できたことはこの上ない喜びでした。森千里先生のお話し、自分の生きた証として時を超えて後世に伝えるものを残す。言うは易く行うは難し。B4に印刷された先生の、お話しの中身を繰り返し拝読し心に刻み生きる励みにしたい。

この度は、ありがとうございました。

# 寄付者名簿

(平成三十年四月〜平成三十一年三月)

次の方々から千葉白菊会へご寄付を頂きました。ご報告かたがた心より御礼申し上げます。ご寄付頂きました金品は本会の運営に使わせて頂きます。

(順不同)

芳名	住所	芳名	住所
鈴木 孝雄 様	市川市	藤 沼 光 司 様	銚子市
関 光旭・幸子 様	船橋市	伊 東 都 様	八千代市
富 樫 里子 様	安房郡	高 橋 廣 司 様	千葉市
水 野 なつ子 様	柏市	富 澤 哲 子 様	香取市
大 橋 美恵子 様	千葉市	藤 田 一 之 様	習志野市
本 田 昭 様	袖ヶ浦市	渡 辺 米 様	船橋市
倉 内 ヨネ子 様	木更津市	匿 名 希 望	山武市
飯 田 敬子 様	船橋市	匿 名 希 望	千葉市
幸 クニ子 様	千葉市		
成毛 壮一郎・節子 様	山武市		
岡 部 栄子 様	千葉市		
関 絢子 様	習志野市		

内 訳

現金 七五〇、〇〇〇円

## 寄贈のモニターも新棟へ

医学部から病院へ向かう桜並木の左側、十メートルほど低い場所に野球場がありました。今、そこはフェンスが張り巡らされ、見る事ができません。医学系総合研究棟はそこに建設中です。

白菊会から解剖学実習のために贈られた液晶モニターなども、新しい教室に移されて使われることになっています。



左奥の建物は大学病院 (9月6日撮影)

## 平成30年度千葉白菊会会員移動状況

平成31年3月31日現在

	入会数	献体数	不献体	転居	退会等	在籍会員数
前年度末	5,556	2,326	452	205	563	2,010
H30年4月	0	10	1	0	0	1,999
5月	0	7	1	0	0	1,991
6月	18	2	0	0	0	2,007
7月	10	4	0	0	4	2,009
8月	4	10	1	0	4	1,998
9月	16	6	0	3	0	2,005
10月	11	7	2	0	5	2,002
11月	3	5	9	0	2	1,989
12月	8	7	1	3	3	1,983
H31年1月	11	6	1	1	2	1,984
2月	8	4	2	0	3	1,983
3月	2	10	1	1	2	1,971
年度計	91	78	19	8	25	-39
累計	5,647	2,404	471	213	588	1,971

入会数：新たに献体登録をした数

献体数：大学に献体した数

不献体：亡くなったときに献体しなかった数

理由>ご家族や施設から死亡の連絡が後日となった  
死亡してから数日経過のため  
会報返戻時の調査により判明

転居：千葉県外に転居した数

退会等：事情により献体登録を取り消した数

理由>気持ちの変化

結核・肝炎の為

家族の意向により

## 平成30年度市郡別献体者数

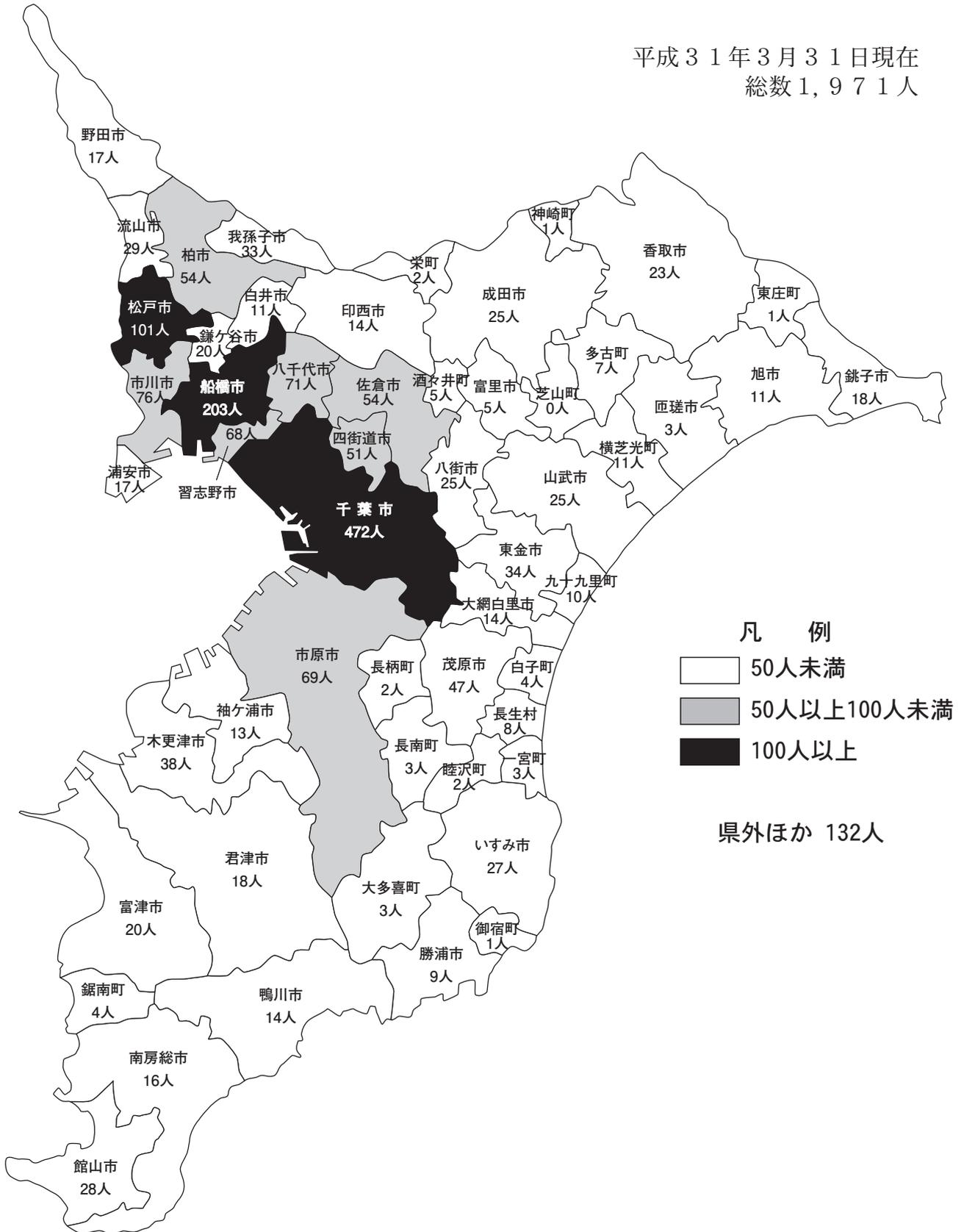
平成31年3月31日現在

区 分	献体者数
千葉市	15
我孫子市	1
印西市	2
市原市	4
市川市	4
大網白里市	1
柏市	4
香取市	2
鎌ヶ谷市	1
木更津市	6
佐倉市	1
山武市	1
匝瑳市	1
館山市	1
銚子市	1
東金市	2

区 分	献体者数
流山市	2
習志野市	4
富津市	1
船橋市	5
松戸市	6
南房総市	1
四街道市	1
八千代市	1
安房郡	1
夷隅郡	2
印旛郡	1
香取郡	2
山武郡	1
県外他	3
合計	78

# 献体登録者分布

平成31年3月31日現在  
総数1,971人



**平成三十一年度事業報告書**  
平成三十一年三月三十一日

1. 献体登録業務  
平成三十一年度の献体登録状況は次の通りである

29年度末在籍者数		2,010
30年度状況	入会者数	+91
	献体者数	-78
	転籍他	-52
	増減数	-39
30年度末在籍者数		1,971

(単位：人)

(2) 新規入会時の医師教育への承諾書提出者 九十一人(100%)  
：解剖学実習及び研究、医師教育用の解剖体は一〇〇%充足された。  
(2) 登録会員の実態調査  
会員からの変更届や返信状況を通じて、実態調査に努めた。

2. 啓発・広報活動  
(1) 会員の口コミによる献体登録は、従来より増えたが、引き続き積極的にお願いしたい。  
(2) 遺族として必要なことを会報で繰り返しお願いし、また保存版としての

(3) 「ご家族へのお願い」の追加要請にも対応した。  
(3) 「無条件・無報酬」の理念も繰り返し訴え周知徹底をはかった。  
(4) 総会で実施した講演の内容を詳しく会報に掲載し、高齢者の健康保持に役立てることができた。

3. 総会の開催  
(1) 第三十七回千葉白菊会総会を平成三十年六月九日(土)午前中、看護学部講義・実習室で実施した。  
(2) 同日の講演会を、千葉大医学部付属病院・神経内科准教授の三澤園子先生により「しびれを知る・癒す」と題して実施し、高齢者にとって大変有意義な知識を得ることができた。

4. 会報の発行  
(1) 会報五十五号を九月中に発行した。  
(2) この会報に総会実施の講演内容を詳しく掲載し、総会欠席の会員からも好評を得た。

5. 大学との連携  
(1) 献体の現役医師活用(CAL)は、平成三十一年度で六九五五人、累計三、三一六人となった。  
(2) 医学生と大学院生の解剖学実習開講日のガイダンスに出席し、献体動機など披歴した。

(3) 医学生の臨床実習に入る証しである白衣式に参加し、良医となる期待と激励の挨拶をし、また参加された大勢の保護者にも献体の意義を伝えることができた。  
(4) 今後の広報のために大学医学部事務方と解剖学教室と前向きな協議をすることができた。  
(5) 新学舎竣工予定に関する大まかな情報を聴取した。

6. 主な行事など  
(1) 六月九日 午前・第三十七回千葉白菊会総会実施、午後・大学主催の解剖慰霊祭・遺骨返還式参列  
(2) 八月二十日 修士肉眼解剖学特論ガイダンスに出席  
(3) 十月六日 解剖学実習開講日ガイダンスに出席  
(4) 一月七日 献体の碑献花式に出席  
(5) 二月一日 ・解剖実習後学生との懇談会(激励)会開催  
(6) 三月二十六日 白衣式参列

(5) 篤志解剖全国連合会の団体部会研修会・年次総会出席(於日本歯科大学)

収支決算書

平成30年度 一般会計収支決算書  
(平成30年4月～平成31年3月)

収入の部

(単位：円)

項 目	予 算 額	決 算 額	増 減	備 考
1. 謝 金				
(1)千葉大学医学部	900,000	900,000	0	
2. 補 助 金				
(1)千葉大学医学部みのはな同窓会	200,000	200,000	0	
(2)千葉大学医学部後援会	200,000	200,000	0	
(3)一般財団法人同仁会	200,000	200,000	0	
(4)千 葉 県	90,000	90,000	0	
(5)千 葉 市	90,000	90,000	0	
(6)千 葉 県 医 師 会	100,000	100,000	0	
3. 特別会計(寄付金)より組入	1,200,000	976,158	△ 223,842	
4. 雑 収 入	10,000	15	△ 9,985	
合 計	2,990,000	2,756,173	△ 233,827	

支出の部

項 目	予 算 額	決 算 額	増 減	備 考
1. 総 会 費	450,000	407,097	△ 42,903	6月9日開催
2. 慰 霊 祭 費	200,000	107,216	△ 92,784	
3. 顕 彰 費	290,000	364,480	74,480	
4. 懇 談 会 費	50,000	44,433	△ 5,567	1月7日開催
5. 通 信 費	450,000	398,580	△ 51,420	
6. 印 刷 費	720,000	813,345	93,345	
7. 会 議 費	10,000	6,338	△ 3,662	
8. 実 費 弁 償 費	205,000	145,000	△ 60,000	
9. 交 通 費	75,000	136,080	61,080	
10. 消 耗 品 費	20,000	10,404	△ 9,596	
11. 会 費 等	260,000	260,000	0	
12. 総会・研修会参加費	200,000	63,200	△ 136,800	日本歯科大学新潟3名参加
13. 雑 費	10,000	0	△ 10,000	
14. 予 備 費	50,000	0	△ 50,000	
合 計	2,990,000	2,756,173	△ 233,827	

次年度へ繰越 0

## 平成30年度 特別会計（寄付金）収支決算書

## 収入の部

(単位：円)

項 目	予 算 額	決 算 額	増 減	備 考
前 年 度 繰 越 金	1,842,784	1,842,784	0	
1. 寄 付 金	200,000	750,000	550,000	
2. 特別事業積立金振替	0	0	0	
合 計	2,042,784	2,592,784	550,000	

## 支出の部

項 目	予 算 額	決 算 額	増 減	備 考
1. 一 般 会 計 振 替	1,200,000	976,158	△ 223,842	
2. 特別事業積立金繰入	500,000	0	△ 500,000	
3. 予 備 費	342,784	0	△ 342,784	
合 計	2,042,784	976,158	△ 1,066,626	

次年度へ繰越 1,616,626

平成30年度の予算額、決算額に関する帳簿および関係書類を監査した結果正確であることを認めます。

2019年4月12日

監事 青 柳 信 子

監事 山 田 健 治

# 二〇一九年度事業計画

平成三十一年四月一日

## 1. 献体登録業務

- (1) 献体の理念の理解度や親族の同意状況を精査し、登録業務を積極的に実施する。
- (2) 献体申込書記載の死亡時の連絡責任者欄に連絡者順位を記入する。
- (3) 献体の現役医師への教育・研究(CAL)についての活用承諾書の一〇〇%取得を目指す。
- (4) 会員の変更届や返信状況などを通して、登録会員の状況把握を引続き実施する。

## 2. 広報・啓発活動

- (1) 献体募集を、ポスター・ホームページなどにより積極的に実施する。
- (2) 献体登録者には「いざと言う時の備え」について周知徹底を図ると共に、ご家族の対応や死亡原因によっては、ご遺体の引取りが出来ない場合もあることを説明する。
- (3) 「無条件・無報酬」の理念についても、繰り返し訴求していく。

## 3. 総会の開催

- (1) 第三十八回総会を六月八日(土)午前中に、看護学部の講義・実習室にて行う。
- (2) 尚、希望する方は午後の大学主催の解剖慰霊祭(ゐのはな記念講堂)にも参加する。
- (3) 総会において有益な講演を行う。
- (2) 総会に続き、昼食後、献体の碑への成願者芳名奉納式を行う。

## 4. 会報の発行

- (1) 九月中に、出来るだけ早目に会報五十六号を発行する。
- (2) 会報には、総会における講演内容の詳細を盛り込む。

## 5. 大学との連携

- (1) 千葉大学医学部関係部門との連携を一層強化し、大学と一体となった千葉白菊会運営に努める。
- (2) 二〇二一年春頃予定の新医学部学舎竣工について、白菊会としての対応を模索する。
- (2) 医学生の実験研修開始時に行われる白衣式に参加し、白菊会として良医となるべき期待を披歴する。

- (3) 役員会に大学医学部事務部の同席を常にお願いし、また必要に応じて大学関係部署との打合せ会を開き、大学との連携の質と量の向上を図る。

- (4) 解剖実習前ガイダンスに出席し献体動機の発表など、大学からの要請には積極的に参加する。又、実習終了後の学生との懇談(激励)を通じて、医学生の人間の成長にも可能な限り努める。

## 6. 主な行事予定

- (1) 六月八日 第三十八回千葉白菊会総会(大学主催) 解剖慰霊祭(遺骨返還式)
- (2) 九月末日迄 会報五十六号を発行
- (3) 十月中旬 肉眼解剖学実習ガイダンス
- (4) 一月上旬 解剖実習後学生との懇談(激励)会
- (5) 三月下旬 篤志解剖全国連合会の団体部会研修会・年次総会

この他、役員会、会報編集会議など年数回実施予定

## 2019年度 一般会計収支予算書

(平成31年4月～令和2年3月)

## 収入の部

(単位：円)

項 目	予 算 額	備 考
1. 謝 金		
(1)千葉大学医学部	900,000	
2. 補 助 金		
(1)千葉大学医学部なのはな同窓会	200,000	
(2)千葉大学医学部後援会	200,000	
(3)一般財団法人同仁会	200,000	
(4)千 葉 県	90,000	
(5)千 葉 市	90,000	
(6)千 葉 県 医 師 会	100,000	
3. 雑 収 入	10,000	
4. 特別会計(寄付金)より組入	1,200,000	
合 計	2,990,000	

## 支出の部

項 目	予 算 額	備 考
1. 総 会 費	450,000	
2. 慰 霊 祭 費	150,000	
3. 顕 彰 費	320,000	
4. 懇 談 会 費	50,000	学生との懇談会実施
5. 通 信 費	450,000	会報、総会案内送付含む
6. 印 刷 費	800,000	ポスター印刷予定
7. 会 議 費	10,000	
8. 実 費 弁 償 費	150,000	
9. 交 通 費	150,000	
10. 消 耗 品 費	20,000	
11. 会 費 等	260,000	
12. 全国総会・研修会参加費	150,000	3名出席予定
13. 雑 費	10,000	
14. 予 備 費	20,000	
合 計	2,990,000	

## 2019年度 特別会計(寄付金)収支予算書

(平成31年4月～令和2年3月)

## 収入の部

(単位：円)

項 目	予 算 額	備 考
前 年 度 繰 越 金	1,616,626	
1. 寄 付 金	200,000	
2. 特別事業積立金振替	0	
合 計	1,816,626	

## 支出の部

項 目	予 算 額	備 考
1. 一 般 会 計 振 替	1,200,000	
2. 特別事業積立金繰入	300,000	
3. 予 備 費	316,626	
合 計	1,816,626	

# 丸山武文前会長を偲んで

監事 青柳 信子



H16.12.21  
献体の碑除幕式にて

令和元年六月三十日、丸山武文顧問（前会長）が八十一歳で逝去されました。今年度の総会に欠席され、役員一同心配していた矢先のことでした。奥様からのご連絡で七月三日に千葉大学医学部へご遺体をお引き取りし、献体（成願）されました。

丸山さんは、平成十年に入会、監事として四年間第三代会長として八年、十二年間役員を務められました。その間、平成十六年十二月には「献体の碑」建立を成し遂げ、大学事務部・環境生命医学の方々との連携を強化し、献体への理解を深めることに尽力されました。また、皆

様からのご寄付を医学生役に立てるようにと考え、四十五周年記念に解剖学のDVDを贈り、先生方や学生に喜ばれました。

平成二十二年に会長を退かれたのちは顧問として総会にも欠かさず出席されました。献体の碑の清掃や草むしりなども人知れずして下さっていました。

私は、平成十七年四月から事務局長として勤めさせて頂いたのですが、献体について何も知らなかった私を根気よく指導して頂き、たいへん感謝しています。五年間ご一緒させて頂きましたが、県庁や市役所へ補助金の申請に出掛けたことを懐かしく思い出します。私が六十歳で白菊会に入会した時には、たいそう喜んで下さって、その時の笑顔が今でも忘れられません。

丸山武文様、有難うございました。ご冥福をお祈り申し上げます。



献体の碑  
だより

◎一月七日（月） 解剖実習最終日、納棺式を終えた学生と教職員、白菊会役員が感謝を込めて、献花と黙とうを捧げました。

◎七月三十一日（水） 六月八日の総会時、雨天の為に行えなかった名簿奉納式を白菊会役員により執り行いました。



## 事務局からのお知らせ

### 1. 事務局長・事務局職員の交代

大学の人事異動の為、事務局長が七月一日から齋藤純に交代となりました。  
また、昨年十月から伊藤恵子が事務局職員を勤めております。  
どうぞよろしくお願いいたします。

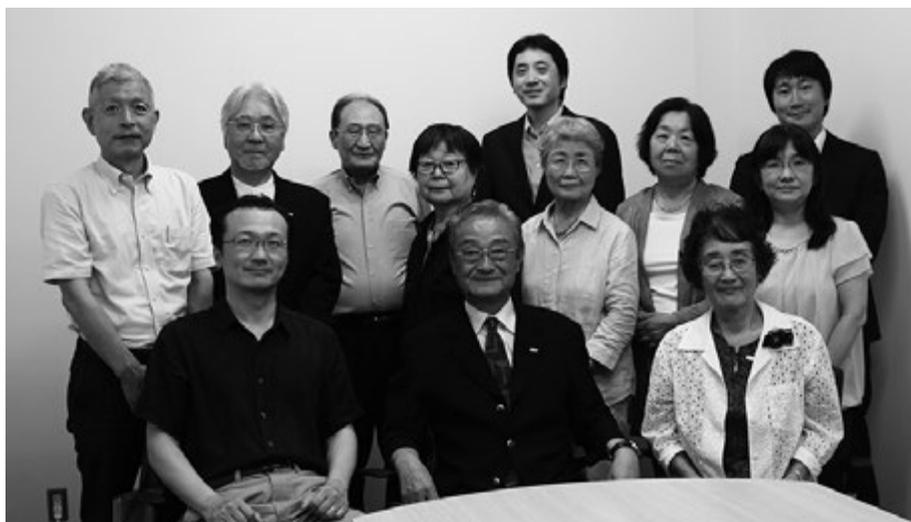
### 2. 登録事項に変更があった場合

登録期間が長い方など、連絡の取れない方が増えて、死亡時に献体出来なくなる方も出ています。登録事項に変更がある方は必ず事務局までご連絡ください。お電話のみでの受付は出来ません。お手数ですが、電話連絡の上、こちらからお送りする用紙に記入・返送していただくか、次の事項を葉書か便箋に書いて、事務局までお送り下さい。書類が到着した日付で処理をいたします。

- ① 会員番号または氏名
- ② 新住所（転居先・入居施設等）
- ③ 電話番号
- ④ 縁故者（死亡時に千葉大学にご連絡下さる方の氏名・住所・電話番号）

### 編集後記

◇七十五歳成願に向け「無病息災・身辺整理」の「終活」で酷暑の夏を乗り切るつもりです。  
(K・S)



## 2019年度役員・事務局紹介

事務局職員	事務局長	監事	監事	理事	理事	理事	理事	理事	副会長	副会長	会長
伊藤恵子	齋藤純	山田健治	青柳信子	水野佳子	野村烈男	酒井徳子	鈴木和男	小宮山政敏	宇佐美幸子	鈴木崇根	大澤國昭

◇八月の暑い日でしたが、浅草は多くの旅行者で賑わっております。その中に若い外国の人達が髪を飾り浴衣を着こなしている姿に驚き、何か涼やかな気持ちになりました。  
(Y・M)

※ 特にご遺体のお迎え可能地域外へ転居した場合、本会は退会となりますのでご留意ください。(お迎え可能地域については事務局までお問い合わせください)

「文芸さんむ」に掲載されました



「文芸さんむ」第10号  
山武市教育委員会発行  
(平成31年2月)

山武市の成毛せつさんからお手紙を頂きました。昨年の白菊会総会を書いたエッセイが山武市発行の市民文集に掲載されたそうです。成毛さんは総会の様子や、献体の意義と精神をわかり易く紹介してくださり、白菊会にとってもありがたいことです。残念ながら全文を掲載できませんが、総会で九十歳以上の紹介をされるのが夢とのこと。今後もお元気で過ごされて、総会に出席されるのをお待ちしております。

❖ 丸山元会長が六月三十日に胃ガンで逝去されました。白菊会の為に尽力をされ慰霊碑の建立に労された丸山様に心より感謝申し上げます。(S・U)

❖ 会報の編集作業でいつも心痛むのは、解剖実習感想文の掲載選定。ただ一つの選定理由は、「紙面都合」のみです。ご理解を。(T・N)

❖ 新聞で身元不明や身元が判明して引き取り手のない遺骨数が増えているとありますが、遺骨をお寺に送って納骨する「送骨」や火葬の時完全に焼いてもらうことで遺骨を持ち帰らない「0葬」もあるようで、世の中の変化が見受けられます。(N・S)

❖ 初めて医学部本館に入った時、物の溢れた廊下やペンキのめくれ上がった壁に驚き、歴史ある建物とはいえ、ここで学ぶ学生の為に心が痛みました。新棟建設、本当におめでとうございます。献体登録で微力ながら大学のお役にたてることに感謝です。(A・N)

❖ 大学内の人事異動により、七月一日付で事務局長に就任いたしました。医学部での仕事は二十年ぶりとなりますが、みなさまのお役に立てるようがんばりますので、よろしくお願いいたします。(J・S)

❖ 初めての編集作業で、なんとか迎えた発行日。まるでわが子を送り出す心境です。ご寄稿頂いた皆様、ご指導頂いた皆様に心より感謝いたします。(K・I)

千葉白菊会会報第56号  
令和元年9月発行

発行人 大澤國昭  
発行所 篤志献体運動団体 千葉白菊会  
〒260-8670  
千葉市中央区亥鼻1-8-1  
千葉大学医学部内  
TEL 043-222-7171 (内線 5023)  
印刷所 三陽メディア株式会社 千葉営業所  
〒260-0824  
千葉市中央区浜野町1397  
TEL 043-266-8437

## 献体について (Q & A)

献体登録希望者からの質問 → 千葉白菊会 (043-222-7171内線5023)

- Q.** 千葉白菊会に入会するにはどうすればよいのですか。
- A.** 白菊会事務局へお電話をいただければ、献体に関するご案内および入会申込書を送付いたします。
- Q.** 入会時、親族が誰もいないので友人等の同意で入会可能ですか。
- A.** 友人でも可能ですが、入会時には3名以上の同意をお願いしております。献体後ご遺骨をお返しいたしますので、お身内の方もしくは献体から2～3年後に必ず連絡が取れ、大学までご遺骨の引取りに来ていただける方をお願いいたします。
- Q.** 手術を何度も受けているが献体できますか。
- A.** 問題なく献体していただけます。
- Q.** 献体できない病歴などはありますか。
- A.** B型肝炎・C型肝炎・結核などの感染症に罹患されたことのある方は献体をお断りさせていただいております。現在は医療技術の進歩により完治していると言われても、免疫力等が低下した場合は再発してしまう可能性があります。その場合、自覚症状が無くても、処置をする職員や解剖をする医学生に感染してしまう危険があるため献体登録はお断りしています。
- Q.** 病歴以外で献体ができない場合がありますか。
- A.** 交通事故や自殺、事件性があると警察が判断し司法解剖された場合、県外で亡くなられた場合、ご家族の承諾が得られない場合、遺骨の引取者がいない場合などの状況では献体が出来ない可能性があります。
- Q.** 献体時の費用は必要ですか。
- A.** ご遺体の引取りからご遺骨の返還までの諸費用（自宅・病院等から大学までの搬送費、火葬費など）は、大学にて負担いたします。ただし通夜・葬儀および埋葬費用等は大学で負担することは出来ません。
- Q.** アイバンクへの登録や臓器提供意思表示カードを携帯していても入会できますか。
- A.** 併行登録は差支えありませんが、アイバンクへの献眼は1眼のみとなります。また、臓器提供をされた方は献体をすることができません。



### 千葉白菊会会員募集中！

千葉白菊会で献体登録をしませんか。

会員の死亡後、遺体は無条件無報酬で千葉大学医学部に  
献体され、学生の解剖実習や医師の教育に役立っています。

お申し込み・お問い合わせは千葉白菊会事務局 043-222-7171 内線5023へ

千葉白菊会会員からの質問 → 千葉白菊会 (043-222-7171内線5023)

- Q.** 住所や連絡者が変わったらどうすればよいですか。
- A.** 住所や電話番号、連絡者（会員証裏面に記載の縁故者）等の変更は、できるだけ早く白菊会事務局へ連絡願います。また、会員証紛失による再発行もご連絡ください。
- Q.** 千葉県外へ転居した場合はどうすればよいですか。
- A.** 千葉白菊会ではご遺体のお迎え可能地域を千葉県内とさせていただいております。県外へ転居の場合は白菊会事務局へ連絡願います。登録の継続ができない場合は、退会のお手続き、あるいは転居先地域の献体登録団体への転籍手続きをご案内いたします。また、県外の病院等にてお亡くなりになった場合ご遺体のお迎えができないことがございます。
- Q.** 入会后、状況や心境の変化により登録を取消することができますか。
- A.** 登録の取消は可能です。会員番号・氏名・退会理由を記入し（書式は問いません）、会員証を同封のうえ白菊会事務局宛てに郵送にてお届けください。万が一、会員証紛失の場合は紛失の旨ご記入ください。

ご家族からの質問 → 千葉大学医学部 (043-222-7171内線5017)

- Q.** 会員が死亡したとき、どうすればよいですか。
- A.** まず、できるだけ早く千葉大学医学部へ連絡してください。24時間受付可能です。ご連絡をいただいた際にお迎えの日時を相談いたします。なお、夜間・休日は警備員が対応いたします。
- Q.** 献体をするときのご遺体に何を着せたらいいですか。
- A.** 特に決まりはございませんので、ご家族が用意されたものでよろしいかと思います。
- Q.** 遺骨が返還されるまでの期間はどのくらいですか。
- A.** ご遺体をお預かりしてからおよそ2～3年位お待ちいただくこととなります。ご遺骨は、千葉大学の解剖慰霊祭・ご遺骨返還式にてお返しいたします。解剖終了後、ご遺骨返還の目途がつきましたら大学より連絡いたします。
- Q.** 献体後、遺体との対面は可能ですか。
- A.** 申し訳ありませんが、大学への搬送後にご遠慮いただいております。
- Q.** 献体後、遺骨を大学で預かってもらえますか。
- A.** 申し訳ありませんが、ご遺骨の保管場所がないため返還させていただいております。
- Q.** 遺骨を灰にして返してもらえませんか。
- A.** 申し訳ありませんが、ご遺体は火葬後（ご遺骨）の状態にてお返ししております。また、散骨は行いませんので、ご希望の方は葬儀社等にご相談ください。

## 千葉白菊会会員のご家族の方々へ

### 献体の実行について ー千葉大学医学部からのお願いー

千葉白菊会会員の方がお亡くなりになった場合、通夜・告別式・大学からのお迎えの日取り等をご遺族の皆様でお決めになったうえで、千葉大学医学部に電話にてご一報ください。

なお、千葉白菊会への連絡は必要ありません。

#### 1. 大学への電話連絡 043-222-7171 (代表)

電話交換手に「献体登録者が亡くなりましたので、献体を行います」とお伝えください。担当者におつなぎしますので、献体の日取り等についてお知らせください。

○平日（午前8時30分から午後5時15分）

医学部の職員（内線5017番）が対応します。

○上記以外の夜間、土日祝日の場合

職員の勤務時間外は警備員が対応するようになっています。

#### 2. お知らせいただく内容

ご遺体を大学へお渡しいただく日時・場所などについてお知らせください。その他ご不明な点はここでお問合せください。

お迎えには大学から委託された葬儀社の者と大学職員が参りますが、夜間・土・日・祝日にうかがう場合は、原則として大学職員は同行いたしませんのであらかじめご了承ください。

#### 3. お迎えまでにご用意いただく書類

①埋火葬許可証……市町村役場に医師の死亡診断書を添えて「死亡届」を提出すると交付されます。

その際、火葬場所は「千葉市斎場」とご記入ください。

②死亡診断書の写し……医師の死亡診断書をコピーしておいてください。

③解剖に関する遺族の承諾書……大学からお迎えにうかがう際に職員が持参しますので、その場でご署名・捺印をお願いします。お迎えに大学職員が同行しない場合は後ほど郵送いたしますので、ご署名・捺印のうえご返送ください。

#### 注意事項

※ 亡くなられてからお迎えまで数日間あく場合は、ご遺体が傷まないようご配慮ください。お棺にドライアイスを入れる場合は、直接ご遺体に触れないようお棺の四隅に入れてください。

※ 事故死（交通事故、れき死、水死等）や自殺の場合は献体できません。その他、お体の状態により保管のための処置が困難な場合にも、献体できないことがあります。

ご不明の点がありましたら、医学部担当者にお問合せください。

(043-222-7171 内線5017)

#### アイバンクにも登録されている場合

※ 登録者が亡くなられた際には、なるべく早く、まずアイバンク協会にご連絡ください。

平日043-222-6803、夜間休日043-222-7171 内線6616

その際、アイバンク協会に献体登録者であることを合わせてお伝えください。

（献体登録者はアイバンクへの提供は片目だけになります。）

その他、アイバンクに関する詳細は、アイバンク協会にお問合せください。

アイバンク協会への連絡後、あらためて大学へ献体の電話連絡をお願いいたします。